一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

2025.02

vol.23

INDEX

002 新理事長あいさつ

003 前理事長あいさつ

004 新理事・監事あいさつ

009 新代議員あいさつ

012 第51回日本肩関節学会学術集会を終えて

014 第52回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ

015 第53回・第54回学術集会のお知らせ

016 肩関節外科医を志す人達へ−肩の魅力を語る

018 学術論文紹介

第37回 高岸直人賞 基礎

国際論文奨励賞受賞者の声

021 海外留学だより

024 各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

国際委員会

高岸直人賞決定委員会

社会保険等委員会

教育研修委員会

学術委員会

広報委員会

財務委員会

定款等運用委員会

リバース型人工肩関節運用委員会

日本肩の運動機能研究会運営委員会

用語委員会

選挙管理委員会

50年史編纂委員会

037 日本肩関節学会 委員会リスト

039 前事務局からのお知らせ

040 新事務局からのお知らせ

040 編集後記

新理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会 理事長 **今井 晋二**

2024年10月より日本肩関節学会理事長を拝命いたしました滋賀医科大学整形外科の今井でございます。日本肩関節学会が2014年に一般社団法人となって以降、初代井樋栄二理事長、第2代玉井和哉理事長、第3代柴田陽三理事長、第4代池上博泰理事長、第５代菅谷啓之理事長の後、第６代理事長を拝命する事になります。日本肩関節学会は2024年に50周年を迎え、世界で最も長い歴史を誇る伝統ある学会であります。それに合わせて50年史がホームページに公表されましたが、その歴史の重みを考えますと改めて身の引き締まる思いでございます。

日本肩関節学会は『肩関節医学の進歩普及に貢献し、もって人類の福祉に寄与する』という目的を遂行するために、日本整形外科学会など国内の関連諸学会と連携し、最新医療技術・知見の教育・研究を推進してきました。日本の肩関節外科医は過去20年で大きな2つの技術革新を経験しました。1つは 2000年前後の肩関節鏡手術です。もう1つは 2014年に導入されたリバース人工肩関節置換術及びその後に増加した解剖学的人工肩関節置換術です。この2つの医療技術は現代の肩関節外科医が臨床を行う上でバックボーンとなっています。

菅谷啓之第５代理事長は肩関節鏡手術の世界的パイオニアであり、菅谷先生が理事長在任期間中には日本肩関節学会と海外の諸学会との連携が推進され、学会のグローバリゼーションが大きく進みました。日本骨折治療学会の学会会長も務められた先々代の池上博泰第4代理事長の在任期間中には、リバース人工関節の臨床応用、特に骨折への応用について日本骨折治療学会（現日本整形外傷学会）との連携のもと、大きな飛躍を遂げました。

今回、日本肩関節学会理事長を拝命するにあたり、私は2つの課題を実感しております。1つは学会の強靭化であります。コロナ禍の終焉の後、国際情勢の不安定化とアメリカでのインフレ等を経て物価が急騰しましたが、これにより日本肩関節学会の財政基盤の脆弱性が鮮明になりました。強靭化にはやはり学会員数の増加が最も重要であります。また、財政の諸事項を洗い直し、健全かつ安定な財政基盤を築かなければならないと考えています。

今一つは学会の活性化であります。日本肩関節学会はすでに活性化しているとのご意見もあるかもしれませんが、他の整形外科分野ではすでに多くの疾患ガイドラインが作成されています。しかし、肩関節疾患に関するガイドラインは、これまで1つも作成されていません。やはり、日本肩関節学会主導でガイドラインが作成できるような環境作りが大切と考えます。

人口の高齢化は今後の我が国においては必発の状況ですが、骨粗鬆症やフレイル・ロコモに対して日本肩関節学会が関与することはこれまであまり多くはありませんでした。骨粗鬆症性上腕骨近位部骨折の診断や手術方法、その後の理学療法等を通じて、高齢者医療や介護の分野にも肩関節学会が活躍する分野が残されているように考えます。

また 女性学会員の活躍をさらに推し進めることにより、学会員数の増加とその活躍の場を新たに開拓していきたいと考えています。女性医師のみならず女性の理学療法士や作業療法士の活躍の場もこれまであまり検討されてき

ませんでしたが、新たに活性化するにはこの分野での学会員の活躍の場を創出していくべきかと考えています。

このように日本肩関節学会が今後取り組んでいかなければ行かなければならない課題は山積みされており、浅学菲才の身で甚だ恐縮ではございますが、日本肩関節学会員の皆様の少しでもお役に立てますよう粉骨砕身する所存であります。どうぞ宜しくお願い致します。

前理事長あいさつ

一般社団法人日本肩関節学会　前理事長 **菅谷 啓之**

2022年10月に第5代理事長を拝命してからあっという間の2年が過ぎ、先の京都での第51回日本肩関節学会をもって日本肩関節学会の理事長を退任致しました。この2年間、我が愛する日本肩関節学会のために全力を尽くしてまいりました。振り返りますと、就任時は理事8名体制であり、橋口宏副理事長をはじめ理事の皆様に助けて頂きながらなんとか乗り切ることができました。しかしながら、2年目は、一身上の都合で橋口副理事長が御退任され理事7名体制となってしまい、私を除く6名の理事の先生方には担当理事の掛け持ちなど多くの負担をおかけすることになってしまいました。この場を借りて、副理事長をお受け頂いた菊川和彦先生はじめ、6名の前理事の先生方に深く御礼申し上げます。現在、今井新理事長を中心とする新体制では新進気鋭の若手の先生方も含めて理事10名体制となっております。このフレッシュなメンバーによる学会運営に大いに期待しております。

昨今の大幅な円安基調のため、年会費に含まれるJSESの購読費の値上がりにより本学会の財務状況の悪化が見込まれておりましたが、JSESのassociate editorでもある今井晋二先生がJSESとElsevier社と交渉して下さった結果、1ドル120円換算で当面対応してもらえることになり、財務上の懸念が大きく軽減いたしました。今井先生のご尽力に感謝いたします。さて、日本肩関節学会の今後目指すべき方向性の一つとして、この財務の安定化が喫緊の課題と考えられます。近年は学会などでも製薬会社やメーカー側も協賛を渋る傾向が強くなっております。本学会でも賛助会員の募集やホームページ上でバナー広告を募っておりますが、集まりが芳しくなく資金繰りをこれら外部企業に頼るのも限界があるように感じております。ASESでは会員個人からdonationを募ることで資金を集めておりますが、本学会でもこのような事を考えていく時期なのかなと考えております。財務状況が安定すれば、トラベリングフェローのサポートなど更に充実させることができ、国際交流を通じて本学会および若手学会員の国際化に大きく貢献できると考えられます。

また、代議員数に関して、長年会員数の4%で推移しておりましたが、代議員選出規則にあるように会員数の８%に近づかせるべく、数年前から理事会の方針として代議員数の増加を目指してまいりました。従って、最近では例年10名程度の新代議員を募集しており、過去2年間でも飛躍的に代議員数が増加し、かつ大きく若返ることができました。代議員の先生方には、学術集会での議論をリードしつつ学術活動を行って頂くと同時に、積極的に委員会活動にも関わって頂き、学会の活性化に貢献して頂きたいと思います。最後に、日本肩関節学会の益々の発展を祈念して、理事長退任のご挨拶とさせて頂きます。

新理事・監事あいさつ

副理事長 菊川 和彦

この度、伝統ある日本肩関節学会理事（3期目）を拝命いたしましたマツダ病院の菊川和彦でございます。皆様から大きなご支援とご協力をいただき、大変ありがとうございました。昨年11月より副理事長を拝命していましたが、今井晋二新理事長のご推薦により引き続き今期も副理事長を務めさせていただくこととなりました。これまで、教育研修委員会、リバース型人工肩関節運用委員会、50年史編纂委員会、幹細胞治療に関する医療広告等調査委員会を担当いたしましたが、今期は教育研修委員会、リバース型人工肩関節運用委員会を担当いたします。

教育研修委員会の主な活動は、肩関節の基本事項を学ぶ研修会（学会会期中に開催）と技術を学ぶキャダバーワークショップの開催です。キャダバーワークショップは、後藤前委員長ほか委員の先生、名古屋市立大の先生がたのご尽力で、円滑に開催することができています。本学会は、諸先輩方が若手医師に厳しくも暖かい指導、教育をしてきた素晴らしい歴史があります。今後も、次世代を担う若手医師が優れた研究や臨床ができる礎になるような研修会、キャダバーワークショップの企画、運営を企画し、運営したいと考えています。

リバース型人工肩関節運用委員会は、「RSA講習会におけるガイドライン説明」と「ガイドライン逸脱症例あるいはガイドラインに記載のない症例の相談」を中心に活動しています。ガイドラインについての疑問点やRSA適応に迷う症例がございましたら遠慮なくご相談いただければと思います。

近年、本学会では円安に伴う「Journal of Shoulder and Elbow Surgery」の購読料の増加などで財務状況が悪化していることが問題となっています。会員数の増加、収入源の確立など何らかの対策を講じる必要があります。これらの点においても、副理事長として今井理事長、後藤財務委員長をサポートし、本学会の発展に努力、尽力していく所存です。

会員の皆様方、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願いいたします。

理事 内山 善康

この度の理事選挙では多くの先生方からご推挙いただき本当にありがとうございました。東海大学付属医学部整形外科は故福田宏明教授、濱田一壽先生が作り上げてきた肩関節外科の歴史を伝承し未来に繋ぐべく肩関節診療に携わっています。2023年4月より診療科責任者となり東海大学医学部付属八王子病院で肩関節の治療を継続しております。治療は鏡視下手術にのみこだわることなく人工関節、外傷治療と言った直視下手術も積極的に行い、現在領域内に8名の肩関節専門医を有するまでになりました。

私は1997年に入会し、2014年より評議員に推薦いただき査読委員会9年（副委員長6 年）、教育委員会6年、財務委員会3年、日本肩の運動機能研究会運営委員会2年、用語委員会2年を務めさせて頂きました。特に査読委員会や教育委員会では沢山の知見を学び肩関節学会の運営に参加したことはとても良い経験となりました。今後も理事となり学会運営の一部を担う事でこれまで以上に多方面からの知恵の収集を図り、学会の発展に寄与していく所存であります。最後になりますが多くの先生方の助けを頂きながら肩関節学会の良いところを伸ばしていけるよう全力で取り組みたいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

理事 後藤 英之

この度、日本肩関節学会理事を務めさせていただくことになりました。重責に不安を覚えておりますが、理事長の今井晋二先生、副理事長の菊川和彦先生のもとで一歩ずつ前進したいと考えております。

私は1990年名古屋市立大学整形外科に入局後、肩関節外科に興味を持ち、名古屋スポーツクリニック院長の杉本勝正先生のもとで、肩関節外科の基礎および臨床研究について指導を賜りました。日本肩関節学会には1993年に入会し、2013年からは代議員に選出いただき、編集委員、倫理・利益相反委員、高岸直人賞決定委員、教育研修委員を務めて参りました。特に、2017年からは教育研修委員長を拝命し、教育研修会、キャダバーワークショップ、手術手技フォーラムの開催運営を担当致しました。特に、キャダバーワークショップでは、関節鏡視下手術の研修と、リバース人工肩関節置換術をはじめとする人工関節手術や多様化する直視下手術を研修できるよう企画運営し、ようやく軌道に乗せることができました。

今年度からは財務委員会の担当をさせていただくことになります。現在、本学会の会員数は増加傾向にはあるものの、世間の景気の状況などに伴う協賛、援助の縮小、昨今の円安による英文購読料の増加、事務局移転の予定など、当学会の台所事情はまだまだ楽観視できる状況にはありません。会員の皆様方にとりましても経済的に厳しい世の中となっておりますが、遅滞のない会費納入にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

本学会は多くの代議員・会員の皆様の活発な学会活動と委員会活動によって、他に例のない質の高い学会運営がなされています。この活力を維持・発展させるために、会員皆様のご助言とご協力を賜りながら、日本肩関節学会のさらなる充実に貢献できるように努めたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

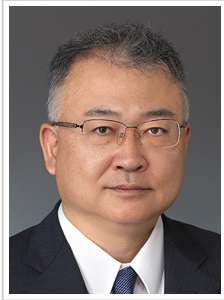
理事 田中 栄

前期に引き続き日本肩関節学会の理事を務めさせていただくことになりました。私は1987年に東京大学医学部を卒業後、東京大学医学部附属病院、三井記念病院、東京逓信病院、武蔵野赤十字病院で主としてリウマチ・関節外科を専門分野として研鑽を積んできました。また1999年には半年間クリニカルフェローとして米国Virginia州のAdvanced Orthopaedic Centersに留学し、人工関節置換術を中心とした臨床に従事しました。その際に腱板損傷や変形性肩関節症や関節リウマチ肩病変などに対する人工肩関節置換術の手術を数多く経験いたしました。帰国後は東京大学医学部整形外科でリウマチ外科及び肩関節外科のチーフとして診療を行ってきました。

2020年からは日本肩関節学会の広報担当理事としてニュースレターの作成に尽力してまいりました。今期は引き続き広報委員会担当理事としてニュースレターの充実に努めるとともに、ホームページのリニューアルによる会員・非会員への学会のアピールを行ってまいりたいと存じます。また用語委員会担当理事として、肩関節外科における用語の適正化も目指す所存です。

何卒よろしくお願い申し上げます。

理事 谷口 昇



このたび、伝統ある日本肩関節学会の理事に就任させていただくことになりました。この場を借りて代議員の皆様に感謝申し上げます。新執行部においては、高岸直人賞決定委員会、定款等運用委員会、新設される地方格差検討ワーキングループの担当理事を務めさせていただきます。私は1995年に鹿児島大学を卒業、学位取得後米国に留学し、スクリプス研究所にて変形性関節症の病態解明に取り組んでまいりました。帰国後は肩関節外科医を志し、北海道で末永直樹先生のフェローとして2年間、宮崎大学で5年間にわたり肩の臨床と研究に専念した後、2018年より主任教授として帰学いたしました。現在は地域医療、研究、教育に従事しながら、変形性肩関節症を模した新規動物モデルの開発やその病態解明など基礎研究にも注力しています。臨床においても、鹿児島大学病院副病院長を兼任しつつ、地域医療の格差を補うため鹿児島県内の僻地・離島において出張手術を行い、リバース型人工肩関節置換術など最新の医療を提供できるよう努めているほか、小中学生を対象とした野球検診を立ち上げ、投球障害の予防にも取り組んでいます。肩関節学会においては、これまで雑誌「肩関節」編集委員会、高岸直人賞決定委員会、国際委員会の委員を歴任し、2023年には大阪肩関節鏡フォーラム（SAFO）の会長を務めました。昨年からKSESの交換留学フェローを受け入れるとともに、ASESおよびSECECのcorresponding memberとして海外との交流も推進しています。日本整形外科学会（代議員）、日本関節病学会（理事）、日本スポーツ整形外科学会（代議員）、日本人工関節学会（評議員）、日本肘関節学会（評議員）など様々な委員会活動を通じて、日本肩関節学会の優れた活動内容や実績を国内外に広く発信していくことが自分の役割と心得ています。何卒宜しくお願い申し上げます。

理事 西中 直也

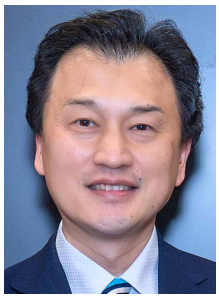
このたび、日本肩関節学会の理事に就任いたしました西中直也です。本学会は、私が卒業後30年にわたり理想とする医師像を築き上げるうえで大きな役割を果たしてくれました。日本肩関節学会が私を育ててくれたと言っても過言ではなく、これまで支えてくださった諸先輩方、共に歩んできた後輩の皆さんに心より感謝申し上げます。このような学会で重要な役割を担う機会をいただけたことを大変光栄に感じるとともに、その責任の重さに身が引き締まる思いです。

私が肩関節の研究を志すきっかけは、昭和大学藤が丘病院整形外科の諸先輩方の肩疾患に対する真摯な取り組みに感銘を受けたことでした。そしてその思いをさらに強くしてくれたのが日本肩関節学会との出会いでした。この学会が提供する学術的な議論や研究成果の共有の場は、他の学会とは一線を画するレベルの高さがあり、私自身もその水準に追いつこうと努めてきました。これまでに、本学会および日本肩の運動機能研究会において148件の発表や講演を行い、そのうち106本の原著論文と症例報告を行いました。また、韓国肩肘学会のトラベリングフェローとして国際交流の場にも参加し、肩関節疾患の理解と治療の発展に貢献できたのではないかと自負しております。

肩関節の診断と治療には、機能評価と機能改善が不可欠です。私は理学療法士の皆さんと連携し、病態診断はもちろん機能診断にも重きを置き、正確な診断に基づいた最適なリハビリテーションを追求してきました。この協力体制が、肩関節疾患に苦しむ患者さんの回復に大きく寄与し、治療成果の向上につながると確信しています。

これから、本学会をさらに発展させるため、会員の皆さんと力を合わせて取り組んでいきたいと考えています。本学会が会員一人ひとりにとってより価値ある場となり、研究や臨床活動のさらなる充実に寄与できるよう全力を尽くします。また、我々の優れた治療技術や研究成果を国際的に認められるものとする努力を続けるとともに、若手研究者の育成に注力し、学会の長期的な発展を支える基盤作りにも取り組んでまいります。今後とも、学会員の皆さまとともに学会の発展、そして肩関節疾患の研究と治療のさらなる進歩に向けて邁進してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

理事 三幡 輝久



師走の候、会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび、日本肩関節学会の理事を務めさせていただくことになりました。理事という大変重要な職責をお引き受けすることとなり、大変光栄に感じるとともに、身の引き締まる思いでおります。

私は1999年に日本肩関節学会に入会いたしました。2002年にはアメリカのカリフォルニア州にあるUniversity of California, IrvineのOrthopaedic Biomechanics Laboratory、Thay Q Lee教授のもとで肩のバイオメカニクス研究を開始し、現在まで多くの研究成果を報告しています。また2003年にはロサンゼルスにあるKerlan Jobe Orthopaedic ClinicにおいてFrank Jobe先生のもとで臨床研修を行い、肩肘関節鏡手術やTommy John手術などの手術手技だけでなく、スポーツ選手を診療する上での心得を学ばせていただきました。帰国後の2005年には高岸直人賞を受賞いたしました。2012年には日本肩関節学会とSECECのトラベリングフェローとしてヨーロッパの著名な先生を訪問いたしました。2015年以降は日本肩関節学会の代議員として活動させていただいています。2012年からは日本肩関節学会国際委員、2014年からは同編集委員、2021年からは同学術委員として委員会活動に参加させていただいています。2018年からは日本肩関節学会国際委員会の委員長に就任し、菅谷啓之理事長にご指示を仰ぎながら、毎年トラベリングフェローの派遣と受け入れに関する業務を行ってまいりました。今後は日本肩関節学会国際委員会の担当理事として、日本肩関節学会のさらなる国際化を進めてまいりたいと考えております。

寒さが厳しくなってまいりますが、どうかご自愛くださいませ。最後に、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。

理事 望月 智之

この度、日本肩関節学会の理事を拝命した望月と申します。この場をお借りしてご推挙いただいた代議員の先生方に深く御礼申し上げます。社会保険等委員会の成果をご評価いただき、信任していただいたと推察しております。

幸いにも令和４年および令和６年度の診療報酬改定において、肩関節学会として大きな成果を得ることが出来ました。しかしながら今後は新規術式の保険収載、既存術式の改正などは厳しくなると予想されます。厚労省ヒアリングには、要望術式に関する資料提出に際し、術式に関するエビデンスの提示が求められます。今までは本学会での手術調査と論文によって乗り切ることが出来ましたが、厚労省からは診療ガイドラインの提示を強く求められております。

日本整形外科学会と関連学会からは18疾患において診療ガイドラインが作成され、南江堂より発刊されて

いますが、日本肩関節学会からは肩疾患に関するガイドランが作成されておりません。診療ガイドライン作成がエビデンスに基づいた治療法の普及だけでなく、厚労省に対する新規および改正術式の保険収載要望において必須である状態です。診療ガイドライン作成には多くの時間と労力が必要となりますが、日本肩関節学会の今後の発展および後進の肩を志す先生方のためにもすぐに取り掛からなければいけない重要課題であると考えております。会員の先生方におきましては、社会保険等委員会の活動および診療ガイドライン作成の際にはお力添えを頂きたく何卒よろしくお願い申し上げます。

理事 山門 浩太郎

この度、第51回日本肩関節学会総会での選挙において理事に選任いただきましたことを深く感謝申し上げます。1999年の入会以来、日韓、日米、そして今年度の日欧トラベリングフェローをはじめ、多くの機会を頂いてきました。2023年にはFellow of Arthroscopy Association of North America (FAANA)の資格をいただき、また同年にはJSES: Seminar in ArthroplastyのAssociate Editorの職位を与えられるなど、大変な幸運にも恵まれました。恩師である故Richard L. Worland先生をはじめ、諸先生方の薫陶、指導、助言があってのことと痛感しております。重ねましてありがとうございました。

この数年を振り返れば、コロナ禍が収束してあらゆる分野で社会の活力が再興、拡大し、本学会の意義と向けられる期待が以前にもまして大きくなっていると感じます。さらには、リバース型人工関節などの新しい術式も本邦導入後10年が経過し、人工知能（AI）の進歩においても誤差逆伝播法の重要なアルゴリズムであるCNN（畳み込みニューラルネットワーク）の開発者の一人であるジェフリー・ヒントン教授が今年のノーベル物理学賞を受賞するなど、ひとつの時代の区切りがつき、最先端であったものが一般的な技術へと転換しつつあります。このような刺激的な時期に理事の重責を頂けたことを感謝しつつ、職責を果たし皆様に貢献できるようつとめてまいります。今後ともご指導よろしくお願い申し上げます。

写真1：社員総会中の新理事による円卓会議
＜事務局が会議室の確保ができず、通路の隅に椅子を並べての会議＞

なお監事は引き続き、下記の先生にご就任いただいております。
塩崎浩之先生　（済生会新潟病院　整形外科）
林田賢治先生　（大阪中央病院）

新代議員あいさつ

代議員 河野 友祐

この度代議員にご選出いただきました藤田医大の河野友祐です。私は2004年に浜松医大を卒業し、初期研修後に慶應義塾大学に入局しました。幼少期から野球をしており、医学生時代に見学に行ったクリニックで川上憲伸投手とキャッチボールをするという経験をしたことも影響し、肩関節外科医を志しました。慶應および関連病院では松村昇先生をはじめたくさんの肩班の先生に直接ご指導いただき肩関節外科としての研鑽を積んでまいりました。2020年からは現職に異動し肩関節を中心に診療を行っております。2022年からは縁あって岩堀裕介先生のおられる病院で直接ご指導いただく機会にも恵まれており、この度は同門の松村先生のみならず岩堀先生からも心温まるご推薦状をいただいたおかげで代議員に選出していただけたと考えております。この場をお借りして改めて深謝いたします。少しでも学会に貢献できるよう微力ながら精進いたしますので何卒よろしくお願い申し上げます。

代議員 桐村 憲吾

この度、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました十全記念病院の桐村憲吾と申します。私は1996年に東邦医科大学を卒業後、順天堂大学整形外科に入局いたしました。卒後9年の時、菅谷先生の地方講演を聞き感銘を受け、脊椎外科・膝関節外科医を諦め肩関節の道を選ぶこととなりました。その後船橋整形で短期フェローをさせて頂き菅谷先生から肩関節鏡手術と変性疾患からスポーツ肩まで幅広い外来診察を、米国Thomas Jefferson大学では1年間Gerald Williams先生から人工肩関節手術を学ぶことができました。肩関節治療を専門にして19年間多くの先生方から多くの事を学ばせて頂き臨床に役立ててきました。今後後輩の育成も含め、自身も更に研究・臨床に精進し日本肩関節学会を盛り上げていきたいと考えています。最後に推薦人となって頂いた新井隆三先生、糸魚川善昭先生を始め、ご支援頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。

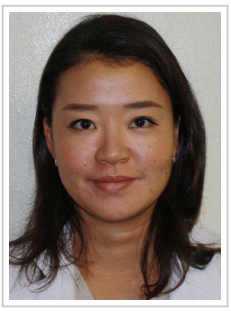
代議員 永井 宏和

この度新代議員となりました多根総合病院の永井宏和です。私は2002年に滋賀医科大学を卒業し、同年滋賀医科大学整形外科に入局しました。関連病院を研修する中で肩関節鏡手術に興味を持つようになり、滋賀医科大学では今井晋二先生のもとで勉強させて頂き、2010年からは船橋整形外科で菅谷啓之先生をはじめ多くの先生方と出会い、ご指導頂きました。2012年からは蘇生会総合病院（京都）で、2019年より現在の多根総合病院（大阪）で勤務しております。

本学会へは2009年に入会し、学術集会では毎年発表するよう心がけております。最近は肩鎖関節脱臼に対する関節鏡視下３重束靭帯再建術や、上腕骨骨折に対してNeviaserポータルから髄内釘を鏡視下に挿入する方法など報告しております。

まだまだ未熟でこれから学ぶべきことが多くある立場ではありますが、学会の発展、後輩の育成など積極的に貢献したいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

代議員 橋本 瑛子



この度日本肩関節学会の代議員に選出していただきました千葉大学の橋本瑛子と申します。私は2006年に千葉大学を卒業し、2008年に千葉大学整形外科に入局いたしました。肩の症例報告で初めての学会発表と論文作成をご指導いただいたことがきっかけで肩関節の分野に興味を持ち、千葉大学肩関節グループの先生方にご指導をいただきながら研鑽を積んで参りました。大学院在籍時は腱板断裂の動物モデル作製の基礎研究に取り組み、2016年大学院卒業後にフランス・ニース大学のPascal Boileau教授の元に1年間臨床留学をさせていただきました。2018年より大学に戻り肩関節診療に従事し、大学院の研究の指導を行っております。今後も、実臨床で感じるクリニカルクエッションを追究し、臨床・研究面ともに一層の研鑽を積み、精一杯精進していきたいと考えております。微力ながら本学会の発展に貢献できるよう尽力していく所存です。今後とも、変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

代議員 早川 敬

新潟中央病院整形外科、関節外科センターの早川敬（はやかわ たかし）と申します。この度、日本肩関節学会の代議員に選任頂きましたこと、大変光栄に思っております。このような重要な役割を果たし、肩関節に関する学術の発展と臨床の向上に微力ながら貢献できる機会を頂きましたことに感謝申し上げます。

これまで日本肩関節学会を支え、肩関節領域の発展に尽力されてこられた諸先輩方や歴代の代議員の先生方に深い敬意を表すとともに、今日の学会の発展と多くの成果を挙げられてこられた先輩方の努力と献身の精神を引き継ぎ、私も一層の責任をもって精進いたします。

肩関節は非常に多様で複雑な解剖学的構造を持ち、治療法も日々進化しております。学会活動を通じて、会員の皆様と共に肩関節に関する知識の共有と技術の向上を図り、学会の発展に役立つよう努めて参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

代議員 日山 鐘浩

この度、日本肩関節学会の代議員に選出いただき、誠にありがとうございます。JAとりで医療センター整形外科の日山鐘浩と申します。心より感謝申し上げますとともに、このような貴重な機会をいただけたことを大変光栄に思っております。

私は2007年に滋賀医科大学医学部を卒業し、2009年に東京医科歯科大学整形外科に入局いたしました。2014年からは大学院にて軟骨再生の仕事と同時に肩関節の臨床研究も行って参りました。2019年から5年間は東京北医療センターに赴任し、望月智之先生の下で指導を受けました。本年度からはJAとりで総合医療センターに整形

外科部長として赴任し、肩関節を中心とした治療を行っております。

まだまだ若輩者の私ですが、日本肩関節学会に粉骨砕身の覚悟で貢献する所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

代議員 平川 義弘

はじめまして。この度代議員に就任させていただきました石切生喜病院の平川義弘と申します。今回代議員という役割を担うにあたり、肩関節診断・治療の質向上に向けた様々な取り組みに携わる機会をいただけることを、大変嬉しく思っております。

肩関節診断・治療の分野では、皆様もご承知の通り、技術革新が日々進み、新しい手術手技が次々と開発され、選別されています。このような変化に迅速に対応し、患者さんに最先端の医療を提供するためには、学会や勉強会での情報交換が不可欠です。そのため、肩関節学会が果たす役割は、今後さらに重要性を増していくと確信しております。

私自身、まだ至らない点が多々あり、皆様にご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、肩関節学会のさらなる発展に少しでも貢献できるよう尽力してまいります。何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

代議員 水城 安尋

このたび、日本肩関節学会の代議員に選出いただきました水城安尋と申します。私は学生時代にラグビー部で、プレー中に肩を痛めた事を機に肩関節に興味を持ちました。2001年に佐賀医科大学を卒業後、九州大学整形外科教室に入局し、現在は佐世保共済病院で約15年間、夢であった肩関節の診療に携わっております。この地域では腱板断裂の患者さんが多く、日々の診療を通じて知見を深めてまいりました。これまで日本肩関節学会の諸先輩方から多くのご指導を賜り、肩関節外科医として成長させていただいたことに深く感謝申し上げます。今後は、学会の発展と後進の育成に微力ながら寄与できるよう努力してまいります。

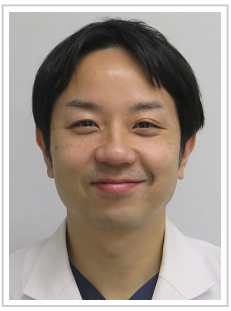
最後になりましたが、本学会の代議員選挙にあたりご推薦いただきました福岡大学の三宅先生、熊本大学の徳永先生をはじめ、多くの先生方に心より御礼申し上げます。何卒よろしくお願い申し上げます。

代議員 結城 一声

この度、鈴木一秀先生と内山善康先生にご推薦を頂き、本学会代議員に選出いただきました。私は2006年に旭川医大整形外科学講座に入局し、大学の先輩である末永直樹先生や三好直樹先生にご指導いただくうちに肩関節外科医を志すようになり、出身地である山形県での地域医療に携わりたいとの思いで、2013年に山形大学整形外科学講座に入局しました。村成幸先生に師事を仰ぎながら研鑽を積み、2016年10月からは肩関節診療班のチーフとして、また今年度は医局長を拝命し、学内外の地域医療に貢献すべく活動しております。本学会には2011年に入会、学術集会での発表を続け、2019年からは査読委員を務めてまいりました。本県で学術集会を開催された故荻野利彦先生のご

遺志を継ぎながら、本学会で学ばせていただいた様々なエッセンスを還元し、後輩を育て、本県、そして日本の肩関節外科の発展に少しでも貢献してまいりたいと思っております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

代議員 吉田 雅人



この度、日本肩関節学会の代議員に就任させて頂きました名古屋市立大学運動器スポーツ先進医学講座の吉田雅人と申します。

私は2001年に東京慈恵会医科大学を卒業し、名古屋市立大学整形外科に入局させて頂きました。入局後、杉本勝正先生に御指導頂き、肩のスポーツ障害および関節鏡手術に興味を持ち、大学院では後藤英之先生に肩関節基礎研究の御指導をして頂きました。その後、フランスで1年間、Philippe Collin先生とGilles Walch先生の下、肩関節外科手術を学び、アメリカのピッツバーグ大学で肩のバイオメカニクス研究をさせて頂きました。

今後の日本肩関節学会の発展のため微力ながら尽力する所存でおります。

最後になりますが、代議員選挙にあたり、推薦人となって頂いた丸太町リハビリテーションクリニック：森原徹先生、昭和大学藤が丘病院：西中直也先生をはじめとする多くの先生方の多大なる御支援に感謝申し上げます。

第51回日本肩関節学会学術集会を終えて

滋賀医科大学整形外科教室 今井 晋二

第51回日本肩関節学会学術集会を2024年10月25日(金)～26日(土)の日程で国立京都国際会館にて主催させていただきました滋賀医科大学整形外科の今井でございます（写真1）。開催にあたりご尽力賜りました諸先生方にこの場を借りまして御礼申し上げます。

写真1：開会式　1800名が収容可能な第一会場での会長挨拶

肩関節を愛する多くの先生が京都の地に足をお運びいただき、登録者数は医師と関連職種（看護師、理学療法士/作業療法士、トレーナー）を含め1646名にのぼりました。本学会のテーマは「Cutting Edge Science for Shoulder」であり、直訳すると「肩関節に関する最新科学」です。会期終了後のオンデマンド配信は行わず現地開催のみで、参加者の顔が見え、交流が深まる学会をめざしました。コロナ禍で下火となっていた全員懇親会も完全復活をめざしました（写真2）。全員懇親会では当初予想の400名を大きく上回り、200名分の食事・飲み物が追加され、途中余りの混雑に警備員も急遽配置されました。瞬間的には600名を超えていたと考えられます（写真3）。

写真2：全員懇親会　200食が追加注文され、一時的には600名以上が参加した

写真3：全員懇親会でのあいさつ　Pascal Boileau先生の挨拶では場内の興奮は最高潮に達する

口演発表は、50セッション計358演題が発表されました。ポスター発表は120題が発表されました。対面開催の真骨頂は1m以内に距離で議論されるポスターセッションと思います。ドリンク・フードサービスを併設し（写真4）、国内屈指の先生方に座長をお願いしました（写真5）。受け取ったドリンクを片手にポスターの前で足を止める先生も多く見られ、常に活気に溢れていました（写真6）。

写真4：ポスターセッション中のドリンク・フードサービス

写真5：国内屈指のドクターによる座長で盛り上がるポスターセッション

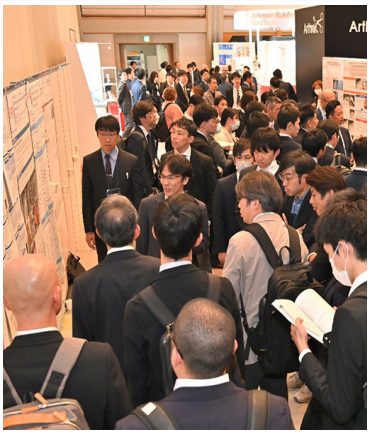


写真6：身の置き場もないぐらい込み合ったポスターセッション

肩関節学会では以前より、海外からの招待者を交えた国際シンポジウム・国際セミナーのセッションを設けていましたが、近年はコロナウイルスの影響で下火になっていました。今回は欧米、韓国、モンゴルの第一線で活躍される11名の先生方と日本国内有数の先生方による合計11セッションからなる対面形式で最先端の知見と技術について議論をしていただきました。

教育研修講演の講演内容はとてもわかりやすく、若手医師や看護師、療法士にとって肩関節の基礎を一から学び直せる有意義な講演となりました。両講演ともに最も早い時間帯での開催にもかかわらず、165名と175名の先生が聴講し、学びの多い教育研修講演でした。

パネルディスカッションでは、「1.バンカート修復の限界」「2.非解剖学的腱板修復術」「3.大御所の診断と治療」「4.各リバース型人工肩関節の特徴と適応」「5.腱板修復方法の特徴と有用性」「6.リバース型人工肩関節のIn-lay/On-layの使い分け」をテーマに、また3つのシンポジウムでは「1.人工関節の今後の方向性」「2.烏口突起移行術の工夫」「3.肩関節脱臼に対する治療と今後の展望」について議論いただきました。一番人気のセッションの参加者は321名に上りました。

2日間で合計12のランチョンセミナーは、いずれのセミナーも開始前から廊下には長蛇の列がみられました。一番人気のセッションの参加者は460名に上りました。多くの部屋が座るのも困難なほど聴衆者で埋め尽くされました。お弁当は当初1500名の参加を予想し、1400食を準備しました。整理券のない聴講者には公演中にお弁当を再配分し、講演後に食べる方も多くおられ、最終的にお弁当のフードロスはゼロ（完売）でした（写真7）。

日本肩の運動機能研究会では、シンポジウムは「凍結肩」と「投球障害肩」の2セッションが行われ、また2日目のコンバインドセッションでは、「投球障害肩」について発表されました。一番人気のセッションの参加者は452名に上りました。

その必要性がよく議論される抄録集ですが、今回は初日午前中に用意した250冊が完売されました。（写真8）

第51回日本肩関節学会学術集会の開催にあたり重ねて御礼申し上げます。

写真7：フードロスゼロとなったランチョンセミナー

写真8：初日の午前中で用意した250冊が完売された抄録集

第52回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ

福岡大学筑紫病院整形外科教授 **伊﨑 輝昌**

この度、第52回日本肩関節学会学術集会を2025年10月10日(金)および11日(土)の両日、福岡国際会議場にて開催させていただきます。これまで福岡大学および福岡大学筑紫病院としては、第3回、第13回を高岸直人教授、第16回を松﨑昭夫教授、第38回を柴田陽三教授が学術集会を開催してきました。肩関節に関する世界で最も歴史のある日本肩関節学会の学会集会を再び福岡の地で開催できることを、大変光栄に存じます。

今回の学術集会のテーマ「学而不厭：継続的探求と次世代への継承」は、中国古典『論語』述而篇に由来する言葉「学びて厭わず」を基にしています。この言葉には、学ぶことに飽きることなく、常に謙虚な姿勢で探求を続けることの大切さが込められています。肩関節外科は、先人たちが築いた知識と経験を基盤に発展してきましたが、未解明の課題も多く残されています。これらに取り組むとともに、次世代には成果だけでなく、探求心や倫理観を引き継ぐことが重要です。本学術集会では、「肩関節手術の長期成績と未来への課題」、「高齢化に伴う肩関節疾患とその克服」、「肩関節手術の成績向上に向けた工夫と基礎的探求」という具体的なテーマを設定し、多角的な視点から議論を深めることを目指しております。また、欧米からはPhilippe Valenti先生(France)、Anthony A. Romeo先生(USA)、 Robert Tashjian先生(USA)、Alessandro Castagna先生(Italy)、韓国からはYong Girl Rhee先生、Sang-Jin Shin先生、Kyu Cheol Noh先生(2024年KSES会長)、 Hyun Seok Song先生(2025年KSES会長)をお招きし、国際的な視点での知見を共有する場としても充実した内容を予定しております。

肩関節はその複雑な構造と多様な機能のため、治療においてリハビリテーションや日常生活指導が欠かせません。併催される第22回日本肩の運動機能研究会では、肩関節疾患の治療とケアにおける最新のエビデンスと実践方法を共有し、理学療法士、作業療法士、看護師など、多職種がそれぞれの専門性を活かしつつ、互いの視点を尊重し連携を深めることを目指します。

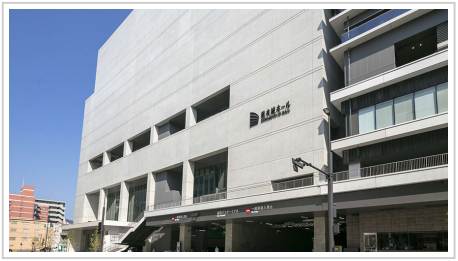
10月の福岡は、日中の平均気温が20°C前後と快適で、市内中心部では大濠公園や福岡城跡を散策しながら自然や歴史を楽しめます。夜は福岡タワーや中洲の夜景を眺め、屋台で地元の味覚を味わうのもおすすめです。少し足を伸ばせば、太宰府天満宮や秋月の歴史的な街並みも堪能できます。

本学術集会が、肩関節外科のさらなる発展に寄与し、参加者一人ひとりにとって有意義な時間となることを願っております。歴史と文化に彩られた福岡で、最新の知見を共有し、肩関節外科の未来を共に創る2日間を過ごしていただければ幸いです。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

第53回・第54回学術集会のお知らせ

第53回日本肩関節学会

学術集会会長：北村歳男（熊本整形外科病院）
併催：第23回日本肩の運動機能研究会
研究会会長：菊川憲志（熊本総合病院整形外科）
【開催日】2026年10月30日(金)～31日(土)予定
【開催場所】熊本（熊本城ホール）予定



第54回日本肩関節学会

学術集会会長：菊川和彦（マツダ病院整形外科）
【開催日】2027年10月頃予定
【開催場所】広島市

肩関節外科医を志す人達へ–肩の魅力を語る

永寿総合病院 小川 清久

「与えられた立派な表題にふさわしい内容の原稿が書けるのか?」との深刻な疑問を抱きながら、机に向かっています。語るに足る業績も無いので、数少なくなった旧体制下―40医大、毎年4000人の新医師誕生―に医師になった者が、どのような環境下に教育を受け、なぜ肩関節外科を志したのかを記したいと思います。最近しばしば感じる「暑苦しい年配者と冷めた若者」的な世代間のギャップを埋める一助になれば幸いです。

まず自身が肩関節に興味を持ったのは、何時だったろうか。昭和47年最初の出張先–富山・高岡市民病院–で与えられた症例報告の題材が「肩峰下滑液包に限局した結核性滑液包炎」でした。同じ病院に出張中であった先輩と何度も夜通し車を走らせ、東京の母校–慶應義塾大–北里図書館で文献調査をしました。それまで全く報告が無かった病態なので、えらく苦労して報告を完成させましたが、私の中で肩関節は「良く分からない不思議な関節」のままでした。

昭和49年に半年間母校に無給医として帰局した際、それまでの出張病院で先輩達から叩き込まれていない分野として肩関節外科があった事、肩関節の診療を担当していた故福田宏明先生が東海大へ転出予定になっている事から、同級生と共に福田先生の指導を得てCodman著「The Shoulder」を1年半かけて読破しました。この時点で、それまで全く曖昧模糊としていた肩関節の構造と機能がかすかに透かし見えるようになりました。しかし、肩関節外科に強い興味を持ったのは、昭和50年栃木・大田原赤十字病院出張中に棘上筋腱部の肩峰下滑液包にbursitis calcareaが腫瘤を形成し、長期間運動障害をきたした症例に遭遇した時だろうと思います。手術的に摘出し、予想以上に劇的な機能改善が得られ、この成功体験は強烈に心に残りました。

昭和51年当時の東海大学では、赴任した福田助教授、関宏講師（故人）が共に肝疾患で入院し、実働整形外科医が今井望教授・有馬亨講師の2人となった為、助人として私が派遣されました。超多忙でしたが、解剖学教室に潜り込んで、解剖用御遺体で肩関節の勉強をさせてもらいました。この時肩関節内構造は極めて個体差が大きく、関節内圧（陰圧）を除去すると硬性要素による下垂位の関節安定性が極めて限局的であることを知りました。また三笠元彦先生が手術時の肩関節裂隙開大に筋鈎の柄を用いていることに着目し、福田先生が私に肩関節用レトラクターの開発を指示されました。解剖用御遺体を用いて試行錯誤の末、腰椎のTaylor retractorの原理を応用し、後にFukuda retractorとして全世界的に知られるようになるring retractorを開発しました。

東海大在職中に母校が定めた卒後6年間の研修期間を終えました。この間に執刀した1000余の手術の1/3が脊椎関連で、肩関節関連は微々たるものでした。しかし、この時代の肩関節外科手術は略全て観血的手術でしたので、各々の専門分野で開発されてきた刃物（メス、のみ、剪刀など）の使用法を学べた事は、その後大いに役立ちました。研修期間を終え、いよいよ専門領域を決めることになりました。この頃母校の整形外科学教室では、青医連運動の置き土産で、研修を修了した教室員の専門は臨床・研究各班が目ぼしい若手教室員に声を掛ける所謂「一本釣り」で決まっていました。不勉強で、可愛げのない私に声を掛けてくれる班は無く、当時大学内では誰も取り組んでいなかった肩関節外科を自分勝手（!）に専門として標榜し始めました。しかし、長野・飯田市立病院への転勤を命じられ、さらに1年半後の昭和55年から5年間埼玉医大に赴任し、当時着手していた基礎的研究を中断せざるを得ませんでした。一方で、この間多くの肩関節疾患を独力で診断・治療し、多くの失敗も有りましたが、多くのことを学ぶことが出来ました。この間に1年半の米国留学（Columbia: Dr. Neer, MGH: Dr. Rowe, Mayo: Dr. Cofield）も経験させてもらいました。昭和60年に母校に帰り、昭和62年初めての独立した研究・臨床班として肩関節班を立ち上げました。

人生では多くの時点で岐路に立たされ選択を迫られますが、私の場合選択は何時も「行き当たりばったり」で消極的でした。高校3年生時には、文系・理系の父・兄が一般社会の荒波に揉まれてぼろぼろになっている姿を見て、それ以外の道として医学を選択しました。大学卒業時には、学生時代サッカー部で整形外科にお世話になる機会が多かったこと、さらに「身体さえ丈夫であればなんの条件も付けない」と先輩にも言われ、劣等生の私は整形外科に飛び付きました。専門分野にしても、先に述べた如く、既存のどの研究・臨床班からも誘いが無かったことが肩関節外科を選択した最大の理由です。消極的な理由での選択ばかりですが、選択した路で「一所懸命」の精神で一心不乱に励めば、道は開かれるようです。また、当時泰斗として知られたDr. Neerが、留学中私がおし・つんぼの状態であったにも拘わらず、その後の国際学会で会うたびに「自分の大切な弟子」として遇してくれた事は、実力以上に活躍の場を広げてくれました。故福田先生、故Neer先生との邂逅が肩関節外科への、また国外での活動の扉を開いてくれました。この意味で、若い医師には国内外を問わず所属機関の枠外で他人の飯を食うことを強く勧めたいと思います。井蛙になるなかれ！

研究面では誇れるような成果を挙げ得ませんでしたが、若い同僚たちと肩の機能障害をきたす病態を幅広く報告してきました。対象を一定の病態に限局しなかったので、得られる知識は当然幅広くなったものの浅くなりました。臨床医としては好都合なのですが、研究者としては・・・・。何を目的に、どの様に実現するか、研究に求められる計画性は「行き当たりばったり」の人生とは相容れぬものでした。

50歳代になり、自験例を対象に長期追跡調査が出来るようになりました。当時でさえ個人情報保護の名目で闇雲に行き過ぎた情報管理が行われていたため、追跡調査は困難を極めました。人口の流動性が高い大都市部の総合病院では、早晩長期追跡調査が不可能になる恐れがあります。長期追跡調査は、調査過程でいろいろなことを教えてくれます。前方不安定症術後のスポーツ選手では、競技復帰から短期間に対側（健側）肩の脱臼が高率に発生することなどから、手術側の肩に対する潜在的な脱臼不安感の存在が窺われます。若い女性に多い非外傷性多方向不安定症では、多くの患者が出産・育児を経ると手術の有無に関わりなく身体所見・愁訴が改善します。慎重な治療法選択が求められます。大学を離れ、自験例の資料さえも使用できなくなった６０歳台後半からは、嘗て自分が報告した発生数の少ない疾患–主に骨折ですが–の総論を手掛けました。発生数が少ない疾患では、診断基準・治療法などが定まっておらず、果ては解剖学的用語の曖昧さに悩まされることもしばしばです。殊に米国からの論文には、しばしば解剖学的定義と臨床的用語が示す範囲の乖離があり、逐一論文内の図（X線、CT像など）などで確認せねばなりません。

現在日本肩関節学会の現役会員の方々は、かなり早い時期から専門分野を決めておられるように見受けられます。早く専門性を身に付ける事は、一方で一般整形外科的・基礎的知識の軽視・欠落を招きかねない危険性があることを絶えず念頭に置くべきでしょう。急いては事を仕損じる！

学術論文紹介

第37回 高岸直人賞 基礎

大阪公立大学大学院医学研究科 整形外科 **飯尾 亮介**

Parathyroid Hormone Inhibits Fatty Infiltration and Muscle Atrophy After Rotator Cuff Tear by Browning of Fibroadipogenic Progenitors in a Rodent Model

Iio R, Manaka T, Takada N, Orita K, Nakazawa K, Hirakawa Y, Ito Y, Nakamura H.

The American Journal of Sports Medicine. 2023 Oct;51(12):3251-3260.

この度は高岸直人賞という名誉ある賞をいただくことができ心より光栄に存じます。本選考委員の先生方ならびに選考にご尽力いただきました理事・代議員の先生方に心より御礼申し上げます。

腱板断裂後の腱板筋の脂肪浸潤と筋萎縮の進行は、腱板修復後の再断裂のリスクとなり、臨床成績不良につながる。Fibro-adipogenic progenitors (FAP) は、骨格筋における脂肪浸潤と筋の恒常性に関与する間葉系前駆細胞である。このFAPを褐色脂肪細胞様の「ベージュ脂肪細胞」に分化誘導することで、骨格筋の脂肪浸潤と筋萎縮が抑制されると言われている。本研究の目的は副甲状腺ホルモン (PTH) がFAPを褐色化させることにより、ラット腱板断裂後の脂肪浸潤と筋萎縮の進行を抑制するかを明らかにすることである。

SDラットを用いて広範囲腱板断裂モデルを作製、PTHを週3回皮下投与し、対照群には同量の溶媒を投与した。4・8週後にラットを安楽死させ、棘上筋の脂肪浸潤をオイルレッドO染色、筋萎縮を筋湿重量と筋繊維断面積、褐色化を免疫染色によるUCP1の発現で評価した。また、マウスから単離したFAPを脂肪分化培地で培養し、PTH投与の有無による褐色化関連遺伝子の発現量とBODIPY染色による脂肪滴の蓄積量を比較した。さらに、PTHを投与したFAPとC2C12の共培養により、C2C12の筋分化が促進されるか評価した。

PTHは腱板断裂後8週の棘上筋の脂肪浸潤の進行を抑制し、PTH投与ラットの腱板筋の筋湿重量の減少は断裂後4・8週で抑制された。さらに、PTH投与群は、腱板断裂後4・8週後において、対照群に比べて筋線維の断面積が大きく、UCP1の発現量も大きかった。また、PTHはFAPsの褐色化関連遺伝子の発現を増加させ、脂肪滴の蓄積を抑制した。PTH処理を行ったFAPsをC2C12と共培養させることによりC2C12の筋管への分化が促進された。

PTHは褐色化関連遺伝子の発現を上昇させることでFAPsをベージュ脂肪細胞へと分化誘導し、この褐色化効果により腱板断裂後の脂肪浸潤と筋萎縮の進行を抑制した。この結果よりPTHが腱板断裂後の脂肪浸潤や筋萎縮に対する治療薬としての可能性が示唆された。

最後になりましたが、本研究を行うにあたりご指導いただいた全ての先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

国際論文奨励賞受賞者の声

行岡病院スポーツ整形外科 **中川 滋人**

この度、第2回国際論文奨励賞を頂きました。私のようなロートルがこのような賞を頂いてよいのか？これからこの賞を励みにして論文を書いていかれる若い先生方から、貴重な賞金を奪ってしまったことをお詫びしつつ、今回受賞に至った経緯を述べたいと思います。

私は高岸直人賞決定委員会に所属している関係で、この賞の創設を知りました。第47回日本肩関節学会学術集会会長を務められた北新病院の末永直樹先生が、日本から世界へ 情報発信すべく、本学会の公式英文機関紙であるJournal of shoulder and elbow surgery誌等への投稿 を奨励するために本学会に寄付された基金を元に、この賞は設立されました。肩関節やその他の整形外科分野だけでなく、あらゆる分野で日本人の国際論文数が減少していると言われていますが、日本人によるJSESへの投稿も年々減少していることを危惧されての寄付であったとお聞きしています。このお話を聞いた時は、果たして1年に3編JSES関連に採用される人なんているのだろうかというのが正直な感想で（思い浮かぶのは1人くらい）、自分が応募することなど夢にも考えていませんでした。

私が、今回英語論文を書きだした理由は２つで、コロナ禍で暇であったことと、60歳を過ぎたら（2022年5月3日でした）論文を書くのをやめようと思ったことでした。その当時、自分の頭の中にあって、まだ書いていなかったテーマは7つでしたが、どれもあまり有望とは言えない内容でしたので、2-3論文アクセプトしてもらえればラッキーかなと思っていました。私が英語の論文を書きだした若い頃は、肩学会で発表し、肩関節に投稿、査読の先生方の評判の良かったものを英語で書いてみるというスタイルでしたが、2重投稿云々がうるさく言われ出した頃からは、学会に発表する前に英語論文を書くスタイルに変わっていきました。何個も論文を書くと、同時に査読結果が返ってきたりすることもあり大変なので、基本的にひとつの論文がアクセプトされたら、次の論文を書きだすようにしていました。しかしながら、最近は後輩の論文の面倒をみながら、自分の論文を書いても、さほど混乱することが無くなってきていましたので、ひとつ書き終わって投稿したら、次の論文を書きだすことにしました。その結果、1論文を除いて60歳の誕生日までに投稿し終わり、60歳のうちにすべての論文がアクセプトされ、何とか当初の目標通り論文執筆活動を終えることができました（JSES;2, JSES international;3, JOS;2）。英語を話したり、書いたりするのが決して得意ではない私が、英語論文をたくさん採用してもらえるようになったのは、若い頃から米田稔先生にたくさんの論文の査読に関わらして頂き、さらに査読委員、編集委員も経験させて頂いたため、査読者が何を聞いてくるのか予想ができ、あらかじめそのあたりをすきなく記載することができるようになったからだと思っています。すなわち、私は肩関節学会に育てて頂き、今回の受賞に至ったのだと確信しています。

これまで私はスポーツ整形外科を名乗ってきた関係で、論文はまず、AJSMかArthroscopyに投稿し、だめならJSESに投稿するという、JSES関係者には大変失礼なことをやってきました。今回の7論文を書く以前は、first author22論文のうち、JSESは1論文のみでした。今回も、似たような感じで投稿していましたが、幸い早いうちにJSESに2論文アクセプトされた関係で、JSESに投稿して、だめでもJSES internationalという判断もできました（賞金をあてにして）。今まで、全然JSES に貢献してこれませんでしたので、受賞後廊下ですれ違った末永先生に握手して頂いた時には、一安心しました。

若い先生方に一言、JSESはめちゃくちゃハードルが高いですが、JSES internationalのハードルはかなり低いです。ただし、JSESにはほぼ毎回native checkを受けるように言われますし、JSES internationalの投稿料も非常に高く、出版に至るにはたくさんのお金が必要となります。私には研究費はありませんし、論文執筆に

対する病院からの援助もありませんので、今回の賞金は非常に有難かったです。末永先生も言っておられますが、賞金がすぐになくなるくらい、頑張ってJSESに投稿してください。苦労して書いた英語論文は、いつまでも残り、世界中の人に読んでもらえます。

徳島大学運動機能外科 川真田 純

この度、第2回国際論文奨励賞を賜り大変光栄に存じます。賞の創設にご尽力されました委員会の先生方と、論文に関してご指導いただきました末永直樹先生、大泉尚美先生はじめグループの先生方に深く感謝申し上げます。

本受賞に際しては、2019年からまた、自身で執筆させて頂く中で他論文の吟味する視点が変化したこと、漠然としていた日常診療に対して治療に対する評価を、少しですがより客観的な視点で行えることになったことも自身の財産となりました。執筆にあたっては本賞が自身の大きなモチベーションとなり、もう1段落、1文の執筆の後押しになったことは間違いなく、本賞の創設にかかわってくださった諸先生方にはあらためて深謝申し上げます。

四国は日本肩関節学会の前身である肩関節研究会の第1回学術集会が1974年に遠藤寿男会長のもと開催された土地であると伺っており、四国から本賞のコンセプトでもある「世界に情報発信する」という第47回日本肩関節学会、末永先生のテーマを継承できるよう、これからも日常診療に丁寧に取り組み、よりよい治療法の考案に寄与していければと存じております。

末筆ではございますが、この度寄稿する機会をいただきました広報委員会の皆様に感謝申し上げます。

写真1：末永グループの先生方と受賞会場にて(左から山根先生、筆者、末永先生、大泉先生、吉岡先生)

倉敷中央病院 整形外科 高山 和政

この度は栄えある賞を賜り誠にありがとうございました。昨年に引き続きこのような賞を頂けたことは身に余る光栄です。この国際論文奨励賞は、ご存知のように性別、年齢、学閥はおろか、職種（PT、OT、看護師）に関係なく、JSES関連誌に3篇以上アクセプトされれば頂ける、いわば広く門戸が開かれた賞です。私は本学

会賞の受賞に至る過程で、論文執筆の厳しさ、孤独を知りましたが、同時に研究の楽しさ、喜び、達成感を知ることができました。出来れば多くの若い先生方にその経験を味わってほしいと思います。いつか論文を書きたいと考えている若い先生方は沢山おられると思います。まずは、最初の一行を書いてみてください。そしてその次の日も、少なくとも一行は書いてください。それを続けることこそが大切だと思います。私は大学院や留学の経験もなければ、論文執筆の指導教官もおりません。大学受験レベルの英語力で十分アクセプトに至る論文執筆は可能なのです。

最後に敬愛する、極真空手　大山倍達の言葉で締めたいと思います。

- 貯金した努力には実力の利息がつく。浪費した才能には挫折の債務がつく。
- 若いうちに1つ泉を掘っておけ！そこから無数の興味が湧いてくる。

日々のクリニカルクエスチョンに対する、なぜ？を突き詰め、発露したものを是非論文にしてみてください。私自身これからも泥臭く臨床、研究に励んでいきたいと考えます。この度は誠に有難うございました。

海外留学だより

名古屋市立大学 **井上 淳平**

1. 自己紹介

ピッツバーグ大学に留学中の井上淳平と申します。名古屋市立大学を2011年に卒業後、2013年に同大学整形外科に入局し、2020年には大学院に進学して肩肘グループに所属しています。しかし、大学院を休学し、2022年9月から2025年3月までの期間、ピッツバーグ大学にて留学することとなりました。

2. 留学に至った経緯

名古屋市立大学から後藤英之先生がピッツバーグ大学に留学されたことをきっかけに、以降継続的に同大学への留学者が生まれ、私は11代目となります。私の指導教官である吉田雅人先生、武長徹也先生が、肩関節のバイオメカニクス研究で著名なRichard E. Debski教授の「Orthopaedic Robotics Laboratory」に留学されて以来、名古屋市立大学の肩肘グループのメンバーは、この研究室で肩関節に関する研究を行っています。英語での学会発表を行う先輩方の姿を見て、私もその背中を追いたいという思いが強くなり、留学を決意しました。

3. 留学生活での不安とその現在の感想

留学が決まった後、円安やインフレの影響で金銭的な不安を感じる日々が続きました。ピッツバーグ大学から給与をいただいているものの、健康保険や家賃でほぼ消えてしまい、さらに名古屋で自宅を購入したばかりだったため、ローンの支払いも続けなければならず、毎日為替相場を気にしながら預金が尽きないかと不安に思っていました。しかし、毎週末は休みで様々な場所に出かけ、スポーツ観戦や旅行を楽しむことができました。生活が安定してくると、意外にも日本では考えられないような割引が頻繁にあり、妻が賢く買い物をしてく

れたおかげで、生活費を抑え、旅行費用を確保できました。ピッツバーグには、アメリカの4大スポーツ（アイスホッケー、アメリカンフットボール、野球）があり、特にMLBのパイレーツのスタジアムでは大谷選手を始めとして日本人選手を見ることもでき、家族で非常に楽しいひとときを過ごしています。

写真1：クリスマスパーティー

写真2：Dr.Debski夫婦とアメフト観戦

4. 家族への留学の話とその反応

留学当初、子供は8歳、6歳、3歳でした。長女はアメリカでの生活を非常に楽しみにしており、長男と次男は特に心配していなかったようです。ちょうどコロナ禍の時期だったため、外出が制限されていたものの、妻も新しい生活に期待を抱いていました。子供たちは現地の公立学校に通っており、初日は大音量で音楽を流しながら踊る先生に迎えられ、すぐに学校生活に馴染むことができました。アメリカの学校では「楽しく通学すること」が重視されており、子供たちは毎日楽しそうに登校しています。習い事も非常に充実しており、サッカー、野球、テニス、アイススケート、スキーなど、季節ごとに多様なスポーツを体験しています。ピッツバーグの夏は自然が美しく、鹿やリス、ウサギなどを頻繁に目にすることができ、長い日照時間を活かして仕事後の時間も楽しんでいます。冬には極寒の気温（マイナス20度）に見舞われることもありますが、乾燥した雪の中での生活は貴重な経験となりました。また、ピッツバーグからはニューヨーク、ワシントン、クリーブランド、コロンバス、ナイアガラなどへ車で簡単に旅行でき、長期休暇を利用してマイアミ、カンクン、ロッキーマウンテン、イエローストーン、グランドキャニオンなどにも訪れ、大自然を満喫することができました。

5. 海外留学を考えている方へのアドバイス

海外での生活は、家族にとっても非常に貴重な経験でした。同時期には神戸大学の山本先生、抽冬先生、鎌田先生、金沢大学の下崎先生、日本大学の矢作先生、昭和大学の上條先生など、同世代の整形外科医と共に切磋琢磨し、家族ぐるみで仲良くさせていただいており、感謝の気持ちでいっぱいです。また、ブラジルやドイツ、ギリシャ、トルコなど、世界各国から集まったフェローたちと研究を共にできたことは、非常に有意義でした。日本で自宅購入を考えている方には、留学後に決断することをお勧めします。

6. ピッツバーグ大学での研究活動

私が所属する「Orthopaedic Robotics Laboratory」では、関節力学試験ロボットを駆使して、肩関節脱臼による関節包の伸長をMRIで検出する研究や、投球障害による前方不安定性に関するバイオメカニクス研究が行われています。クリニックでは、ACL再建後に採取された大腿四頭筋腱の術後形態変化や、腱板断裂の保存治療における断裂サイズの変化を超音波で調査しています。また、難治例の膝手術や肩関節手術を多

数執刀されているMusahl先生の手術見学を行い、月曜の7時30分からの腱板断裂に関するミーティング、火曜の7時からのACLミーティング、水曜の6時からのスポーツカンファレンスなど、朝早くからのミーティングに参加しています。木曜の5時30分からのMusahl先生主催のワークアウトにも時折参加させていただいています。

写真3：Musahl先生, fellowとworkout

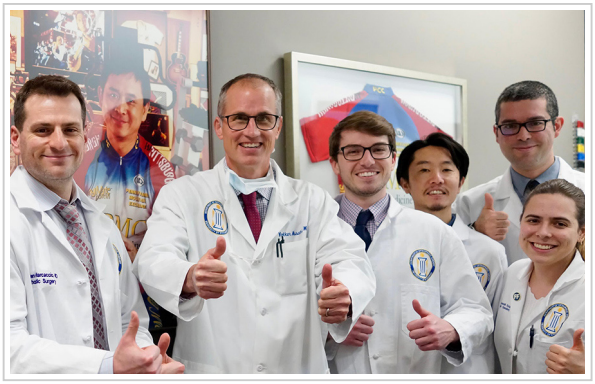


写真4：Musahl先生、fellowと外来にて

最後に

この貴重な留学経験を支援していただいた村上英樹教授、吉田雅人先生、武長徹也先生をはじめ、同門の先生方に心より感謝申し上げます。

写真5：ピッツバーグの黄色い橋

各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

新担当理事 **内山 善康**　新委員長 **新井 隆三**
前担当理事 **北村 歳男**　前委員長 **佐野 博高**

雑誌「肩関節」編集委員会では長らくご尽力いただいた北村歳男理事と佐野博高委員長が退任され、2024年度から内山善康先生が担当理事に、また新井隆三が委員長に就任することとなりました。これにより二村昭元副委員長とともに執行部は3人体制となり、8名の新しい先生方を含む35名の委員の先生方とともに委員会を構成することになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、2025年発刊予定である雑誌「肩関節」第49巻の編集作業は既に始まっております。2024年12月10日に論文投稿を締め切り、第48巻を上回る170論文のご投稿をいただきました。誠にありがとうございました。鋭意査読・編集作業を進めておりますので、引き続きご協力のほど、お願いいたしたい次第です。

日本肩関節学会とともに長い歴史のある当委員会ですが、新しい時代の潮流とともに解決すべき課題を抱えております。AI（人工知能）が人口に膾炙していく中で学術研究・発表に及ぼす影響が懸念されています。これは全世界的かつ現在進行形の問題であり、何らかの対策ですべて解決するわけではありませんが、雑誌「肩関節」としても標準的なルールは踏まえておかなくてはならないと思われます。また査読のありようも常に議論されるテーマで、投稿してくださる学会員の先生方にはもちろん、ボランティアで査読してくださる編集委員・査読委員の先生方にもストレスが少なくなるようなコンセプトが今後醸成されたらと考えております。

以上のようなことが背景にあるため、当委員会では投稿規定やチェック表を随時改訂しています。本誌に論文を投稿される際は、日本肩関節学会のホームページで、必ず最新の情報をご確認いただきたく思います。

雑誌「肩関節」への投稿規定について：http://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html

文責：新井 隆三

国際委員会

新担当理事 **三幡 輝久**　新委員長 **長谷川 彰彦**
前担当理事 **森原 徹**　前委員長 **三幡 輝久**

トラベリングフェローの派遣と受け入れについてご報告させていただきます。

2024年9月2日から10月5日まで福井総合病院の山門浩太郎先生がSECECトラベリングフェローとして、ヨーロッパを訪問されました。2024年9月17日から10月19日まで千葉大学大学院医学研究院の落合信靖先生と奈良県立医科大学の井上和也先生がASES Traveling Fellowとしてアメリカを訪問されました。アメリカではハリケーンに遭遇し急遽予定が変更となるという緊急事態があったとのことですが、無事に帰国されております。

2024年9月15日から9月22日までASESトラベリングフェロー2名（Dr. Cagle Paul、Dr. Gilotra Mohit）が訪日されました（訪問地：大阪、京都、東京、仙台）。また10月7日から11月2日までKSESトラベリングフェロー2名（Dr. Jun Gyu Moon、Dr. Young Min Noh）が訪日されました（訪問地：千葉、東京、大阪、名古屋、京都、札幌）。トラベリングフェローのお世話をしてくださった肩学会の先生には深く感謝を申し上げます。

10月7日の国際委員会において2025年度KSES Traveling Fellow の選考を行いました。3人の先生が立候補

されておりましたが、厳正なる審査の結果、石切生喜病院の平川義弘先生と公立福生病院の吉田勇樹先生が選出されました。平川先生と吉田先生には2025年3月に韓国の著名な先生の施設を訪問していただきます。

文責：三幡 輝久

高岸直人賞決定委員会

新担当理事 **谷口 昇**　新委員長 **山本 宣幸**
前担当理事 **伊﨑 輝昌**　前委員長 **船越 忠直**

第37回高岸賞受賞者として以下の二つの論文が決定いたしましたのでご報告申し上げます。
下記お二人の先生は、第51回日本肩関節学会学術集会の全員懇親会で表彰されました。

基礎

飯尾 亮介 先生　大阪公立大学大学院医学研究科　整形外科
『PTHはラット腱板断裂モデルの脂肪浸潤・筋萎縮の進行を抑制する』

臨床

土山 耕南 先生　兵庫医科大学　整形外科学教室
『リバース型人工肩関節置換術における術中の神経ストレス評価』

また、第51回日本肩関節学会の採択演題の中からベストアブストラクトとして以下の16演題が選ばれました。

＜基礎＞

- 飯尾 亮介先生　（大阪公立大学大学院医学研究科　整形外科）
  「PTHは慢性腱板断裂ラットの筋内脂肪浸潤率と筋萎縮を改善する」
- 鶴上 浩規先生　（順天堂大学医学部附属浦安病院　整形外科）
  「特発性凍結肩における糖化・酸化ストレス経路の詳細なメカニズム」
- 加藤 達雄先生　（神戸大学大学院　整形外科）
  「Glutaminase1阻害薬の腱治癒に与える影響」
- 中村 匠先生　（慶應義塾大学　整形外科）
  「硬組織切片を用いた腱板構成筋変性評価と筋変性抑制効果の検討」
- 楠瀬 正哉先生　（神戸大学大学院　医学研究科　整形外科）
  「Stump分類に基づく腱板脆弱性とミトコンドリア機能低下の関連性」
- 佐野 博高先生　（仙台市立病院　整形外科）
  「4-part上腕骨近位端骨折の発生機序：粉砕はどのように進むのか？」
- 星川 恭賛先生　（山形県立保健医療大学大学院）
  「腱板断裂における残存腱板筋の代償的作用の検証」

- 古川 隆浩先生　（神戸大学大学院　整形外科）
  「ラット腱板修復モデルにおけるヒト腱板細胞塊の有効性の検討」

＜臨床＞

- 小薗 直哉先生　（九州大学　整形外科）
  「Os acromialeの有病率と関連因子の検討-多施設共同研究-」
- 新福 栄治先生　（寒川病院　整形外科）
  「腱板断裂に伴う夜間痛が中枢性感作と睡眠状態に及ぼす影響」
- 幸田 仁志先生　（関西福祉科学大学　保健医療学部リハビリテーション学科）
  「無症候性断裂肩の将来的な肩痛発生を予測する身体所見の特徴」
- 甲斐 義浩先生　（京都橘大学　健康科学部）
  「地域在住高齢者における肩痛関連要因の包括的解析」
- 戸野塚 久紘先生　（神奈川リハビリテーション病院　整形外科）
  「対麻痺症例における腱板断裂の罹患率および肩関節障害との関連性」
- 澤田 良平先生　（千葉大学大学院医学研究院　整形外科）
  「IDEAL法を用いた鏡視下腱板修復術後の腱板筋脂肪変性評価」
- 北村 歳男先生　（熊本整形外科病院）
  「骨端線閉鎖前および成人の烏口突起骨折の診断について」
- 湊 俊毅先生　（石切生喜病院　整形外科）
  「多施設共同研究によるRSA術後1年の可動域に影響する因子の検討」

第三回(2023年度)　国際論文奨励賞

第47回日本肩関節学会からの使途特定寄付金を財源とする賞の設立を理事会より高岸賞委員会に諮問され、下記の先生が国際論文奨励賞として表彰されました。

中澤 克優 先生（大阪公立大学大学院医学研究科整形外科）

- Impact of constrained humeral liner on impingement-free range of motion and impingement type in reverse shoulder arthroplasty using a computer simulation. J Shoulder Elbow Surg. 2023 Jan;33(1): 181-191.
- Non-thermal atmospheric pressure gas discharge plasma enhances tendon-to-bone junction repair in a rabbit model. J Shoulder Elbow Surg. 2024 Online ahead of print.
- Bone mineral density around cementless short stems after reverse shoulder arthroplasty: changes over time and its relationship to stem positioning. JSES Int. 2023 Sep 22;8(1):119-125.
- Reliability and validity of a new deltoid muscle area measurement method after reverse shoulder arthroplasty. JSES Int. 2023 Sep 3;7(6):2500-2506.

川島 至 先生（名古屋大学整形外科）

- Arthroscopic Bankart repair with peeling osteotomy of the anterior glenoid rim preserves glenoid morphology. J Shoulder Elbow Surg. 2023 Dec;32(12):2445-2452.
- Prevalence and treatment rates of osteoporosis among individuals with rotator cuff tears. J Shoulder Elbow Surg. 2024 Nov;33(11):e606-e609.
- Greater distance from the glenosphere center to the acromion reduces risk of acromial impingement in semi-inlay reverse shoulder arthroplasty. JSES Int. 2024 May 28;8(5):1069-1076.

伊藤 雄 先生（整形外科北新病院）

- Electromyographic activities of glenohumeral joint muscles during shoulder forward flexion with isometric horizontal abduction loading. J Shoulder Elbow Surg. 2023 Aug;32(8):1718-1727.
- Passive shoulder abduction range of motion at 3 months postoperatively is the most important prognostic factor for achieving full recovery of range of motion at 6 months after arthroscopic rotator cuff repair. JSES Int. 2024 Apr 7;8(4):806-814.
- Factors associated with subjective shoulder function pre- and postoperatively after arthroscopic rotator cuff repair. JSES Int. 2024 Nov 8(6):1207-1214.

高山 和政 先生（倉敷中央病院）

- Both angled bony-increased offset and metal-augmented baseplates provide satisfactory bone incorporation to the glenoid in reverse total shoulder arthroplasty: a radiographic evaluation using tomosynthesis. J Shoulder Elbow Surg. 2024 May;33(5):1058-1067.
- Comparison of the clinical outcomes and temporal changes between superior capsular reconstruction and reverse total shoulder arthroplasty in patients with irreparable rotator cuff tear without osteoarthritic change. J Shoulder Elbow Surg. 2024 Aug;8 Online ahead of print.
- Association between the canal filling ratio and bone resorption in trabecular metal stems in reverse total shoulder arthroplasty: A radiographic analysis using tomosynthesis. JSES Int. 2024 May 30;8(5):1077-1086.

お忙しい中、高岸賞選考、ベストアブストラクト選定、国際論文奨励賞選定にご協力をいただいた、すべての先生に心からお礼を申し上げて、委員会報告と致します。

追伸；これまで長年、高岸直人賞選考委員会の担当理事としてご尽力頂きました伊﨑輝昌先生が御退任されました。誌面をお借りして、これまでのご指導に深謝申し上げます。

文責：船越 忠直

社会保険等委員会

新担当理事 **望月 智之**　新委員長 **長谷川 彰彦**
前担当理事 **高瀬 勝己**　前委員長 **望月 智之**

令和6年度の診療報酬改定が施行され、日本肩関節学会から要望した3つの新規術式　①肩甲骨烏口突起移行術　27,380点　②関節鏡下肩関節唇形成術（関節鏡下肩甲骨烏口突起移行術を伴うもの）46,370点　③関節鏡下肩関節授動術（関節鏡下肩腱板断裂手術を伴うもの）　54,810点　とすべてにおいて診療報酬を認めていただくことが出来ました。会員の先生方のご協力（肩の手術アンケート）の賜物だと考えております。

現在は令和8年度の診療報酬改定に向けて作業を行い、外保連試案として収載された①肩関節唇形成術（自家腸骨移植術を伴うもの）（関節鏡下）　②人工関節置換術・肩関節(腱移行術を伴う)の2案を要望することと致しました。新規術式要望のアンケートに多くのコメントを頂いたのですが、手術件数の多い術式の増点要望（肩甲下筋腱修復など）は、厚労省に提出する「医療技術評価提案書」に記載する「予想影響額」（その術式が認められると年間国庫負担がどの程度増えるか）が膨大な金額（億単位）になり、要望しても受け入れていただくことが困難であると判断し見送っております。RSAに関する増点要望などのご提案を頂くのですが、診療報酬は手術時間に依存することからTSAよりも点数が下がる可能性が高いと考え、要望を見送っております。

厚労省に提出する「医療技術評価要望書」には診療ガイドラインの記載を強く求められています。日本肩関節学会ではガイドラインが作成されておらず、作成が急務であると感じています。また4年に1度本学会で行っている「肩手術アンケート」はJOANRがあるから不必要では？という意見も頂戴します。JOANRのデータを使用するには日整会の症例レジストリー委員会に要望書を提出しますが、肩疾患に関するすべてのデータを入手できるわけではなく、一部のみの使用であることからも、独自のデータベースを持つことは必要であると考えております。次回の肩手術アンケートは2025年1月1日から2025年12月31日までの症例を2026年3月頃に集計する予定でおります。引き続き会員の先生方におきましては、社会保険等委員会の活動にご協力を賜りたくお願い申し上げます。

文責：望月 智之

教育研修委員会

担当理事 **菊川 和彦**　新委員長 **土屋 篤志**
前委員長 **後藤 英之**

今年度の教育研修委員会の活動内容について報告致します。

第16回教育研修会を第51回日本肩関節学会開催期間中に開催しました。早朝の開催にも関わらず多数のご参加を賜り誠にありがとうございました。講演のハンドアウトは会員専用の学会ホームページから入手できるようにしていますのでご活用ください。

第16回 教育研修会　会場：国立京都国際会館

日程：2024年10月26日（土）

教育研修講演1 第3会場　8:00〜9:00

座長：マツダ病院整形外科 菊川 和彦先生
演題1：肩の診察・画像診断
演者：東北大学　整形外科　山本 宣幸先生
演題2：肩の機能解剖・バイオメカニクス
演者：至学館大学　健康スポーツ科学科　後藤 英之先生

教育研修講演2　第3会場　9:10〜10:10

座長：至学館大学 健康スポーツ科学科 後藤 英之先生
演題1：肩関節周囲炎の診断と治療
演者：八王子スポーツ整形外科　小林 尚志先生
演題2：腱板断裂の診断と治療
演者：名鉄病院　整形外科　土屋 篤志先生

また、第8回日本肩関節学会キャダバーワークショップを11月23日（土）、24日（日）に、名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンターにて開催致しました。参加者は関節鏡コース6名、切開手術人工関節コース6名の合計12名で、関節鏡視下手術、直視下・人工関節手術コースをそれぞれ3テーブルずつ、6人の講師によって手術手技の実習指導をして頂きました。また、11月23日（土）18時00分から第8回肩関節疾患手術手技フォーラムを名古屋市立大学病院大ホールにて開催し、講演会および企業展示を行いました。

第8回 キャダバーワークショップ・肩関節疾患手術手技フォーラム

実施責任者

- 吉田 雅人先生（名古屋市立大学 整形外科）

講師

- 内山 善康先生（東海大学 整形外科）
- 菊川 和彦先生（マツダ病院 整形外科）
- 後藤 英之先生（至学館大学 健康スポーツ科学科）
- 酒井 忠博先生（トヨタ記念病院 整形外科）
- 土屋 篤志先生（名鉄病院 整形外科）
- 山本 宣幸先生（東北大学 整形外科）

（五十音順）

参加者

- 相江 直哉先生（倉敷中央病院 整形外科）
- 浅野 博美先生（岐阜大学 整形外科）
- 有福 佑先生（神戸医療センター 整形外科）

- 小田切 優也先生（北アルプス医療センターあづみ病院 整形外科）
- 小西 宏樹先生（富永病院 整形外科）
- 近藤 伸平先生（川口工業総合病院 整形外科）
- 境田 萌人先生（十全記念病院 整形外科）
- 高橋 恒存先生（自治医科大学 整形外科）
- 竹之下 真一先生（豊岡第一病院 整形外科）
- 富永 明子先生（守口敬仁会病院 整形外科）
- 日野 雅仁先生（長野市民病院 整形外科）
- 堀家 陽一先生（昭和大学藤が丘病院 整形外科）

（五十音順）

今年はキャダバーワークショップの参加希望者が多数となり、受講をお断りしなければならない事態が生じました。参加できなかった皆様には誠に申し訳ありませんでした。来年度ぜひ、再応募頂きたいと存じます。

ワークショップの開催に当たっては、名古屋市立大学統合解剖学教室の皆様、整形外科学教室及び運営事務局のNPO法人メリ・ジャパン様をはじめ関係各位の皆様の多大なご協力、協賛を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

今後も教育研修委員会は会員の皆様の肩関節診療のお役に立てるよう研修会やワークショップなどの教育活動を行って参ります。今後ともご指導、ご意見を賜りますようお願い致します。

文責：後藤　英之

学術委員会

新担当理事 **山門 浩太郎**　委員長 **藤井 康成**
前担当理事 **高瀬 勝己**

学術委員会の活動報告としては、現在二つの研究テーマに対して、 担当委員を中心に、主にweb会議を通して委員会内で検討を重ねつつ、活動を行なっております。

一つ目は、腱板脂肪変性の評価に関する調査です。調査内容としては、MRI画像におけるGoutallier分類の信頼性に関して、日本の肩関節外科医を対象に調査を行うことです。現在、トライアルとして、学術委員会内で棘上筋をターゲットとして、関心領域を棘上窩全体と棘上筋筋膜内の2通りを設定し、検者内検者間信頼性に関しての検討を行っている段階です。今年上半期に行った委員会内での最初のトライアルにて、棘上筋脂肪変性評価の関心領域が上記2通りの評価に二分されていることが判明し、そのためトライアルの仕切り直しに至った次第です。最終的には、1) ターゲットを他の腱板まで広げていく、2) 調査対象を肩学会員全員まで広げる、など協議しながら、調査を進めて行く予定ですが、まだまだ長い道のりとなりそうです。

二つ目は、肩甲骨関節窩の離断性軟骨炎（OCD）です。投球スポーツや体操選手で見られる、非常に珍しい疾患で、渉猟できる範囲では疫学的調査は世界的にもありません。日本における関節窩OCDの疫学調査を肩関節学会員を対象にアンケートを行い、その発生件数や治療法など検討していきたいと考えております。現在、担当委員を中心にアンケートフォームを作成中です。フォーム完成後は、理事会の承認を得て、皆様にご協力をいただくことになります。おそらくアンケート調査の実施は本年度になるとは思われますが、何卒ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

本年度は、また新たなメンバーが加わるとともに、昨年度まで本委員会の運営責任者としてご尽力された高瀬理事が退任されたため、山門新理事の元で学術委員会もリニューアル化し、前述の企画を引き継いでいくこととなります。何とか調査担当の委員の先生を中心に、新委員会メンバーの先生方とディスカッションを重ねながら、よりよい調査ならびに報告ができますよう鋭意努力していく所存であります。新体制となりました学術委員会の活動に対しまして、会員の皆様の益々のご厚情ならびにご協力を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

文責：藤井 康成

広報委員会

担当理事 **田中 栄**　委員長 **夏 恒治**

2024年　活動報告

2024年はニュースレター21号と22号を発刊しました。

ご寄稿いただいたみなさまに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、2024年はホームページをリニューアルし、より多くの会員のみなさまにご活用いただけるよう取り組みました。おかげさまで、情報発信の幅が広がり、会員のみなさまからもご好評をいただいております。

2025年　活動計画

2025年はニュースレター23号と24号の発刊を予定しています。内容やデザインについて、会員のみなさまからのご意見を積極的に取り入れ、さらに充実したものを目指します。ぜひ、みなさまのご提案をお寄せください。

さらに、2025年には「日本肩の運動機能研究会」のホームページリニューアルも進めています。これにより、より使いやすく、会員間の交流や情報共有をさらに円滑にすることを目指します。

加えて、一般の方向けのコンテンツ作成や広告バナー導入に向けた規約の策定作業も進行中です。これにより、肩関節に関する情報を広く発信し、社会における当学会の存在感を高めたいと考えています。

会員のみなさまへのお願い

広報活動をさらに充実させるためには、みなさまのご意見・ご協力が欠かせません！

- ニュースレターの内容やデザインに関するアイデア
- ホームページに期待する機能やご提案
- 一般向けコンテンツに関する斬新なアイデア

特に、若い会員のみなさまの積極的なご参加をお待ちしております。広報委員会の活動に参加することで、コミュニケーション力や企画力が身につきます（?）。共に学び合いながら、会員間の絆を深めていきましょう！

お問い合わせ

広報委員会では常に新しいアイデアを募集しております。お気軽にご連絡ください。みなさまと一緒に、学会の未来を創造していけることを楽しみにしています。

文責：夏 恒治

財務委員会

新担当理事 **後藤 英之**　委員長 **酒井 忠博**
前担当理事 **伊﨑 輝昌**

財務委員会は2024年度より伊崎輝昌先生に担当理事をお願いして参りましたが、無事に第51回日本肩関節学会学術総会を終えたところで、次年度は後藤英之先生に担当理事をお願いすることとなりました。引き続き経験豊富な委員の皆様のお力をお借りして、出来る限り財務の改善に尽くしたいと存じます。

2023年度の財務報告としては前年度増収であった受取会費が減収となりました。これについては正会員と準会員1号の会費納入が少なかったことが主な原因と考えられます。また一番の懸案事項であったJSES購読料の支払額は為替レート150円想定で予算計上しておりましたが、結果的に120円で取り扱われることとなり、大幅な削減となりました。印刷物のペーパーレス化、会議のリモート化により経費削減が出来たこともあり、最終的には151,211円の増収となりました。

来期予算編成に向けての大きな問題点は事務局変更であります。学会運営をスムーズに維持していくために、早期に決着されることを望みます。

また、昨年度と同様、今後も現在のような円安が長期化し、JSES購読料が増加するようであれば、JSESの購読についてのルールを見直すことや、年会費値上げを考慮せざるを得なくなることは変わりません。財務委員会としては、年会費の徴収を事務局に確実に行って頂くようにお願いするとともに、各委員会との連携を強化し、事業費について早めに相談していくことや、引き続き可能な限り経費節減の努力をして参ります。

会員の皆様方におかれましては引き続き御理解、御協力を御願いしますと共に、財務改善のため、お知り合いの先生へ会費納入を促して頂き、さらなる会員増加に御協力頂けますよう、よろしくお願い申し上げます。

文責：酒井 忠博

定款等運用委員会

新担当理事 **谷口 昇**　新委員長 **糸魚川 善昭**
前担当理事 **伊﨑 輝昌**　前委員長 **西中 直也**

このたび、当委員会ではコロナ禍を契機に導入された Web選挙の継続に伴う関連規則の変更を実施しました。変更に際しては以下の反映すべき事項を考慮し、慎重に議論を重ねました。

1. 選挙方法の明確化
2. Web投票の招集および投票開始日・期間の設定
3. 投票の定義
4. Web選挙時の具体的な投票方法

これらの内容について理事会で審議・承認され、その後、選挙管理委員会より反映、提出された規則変更案について、当委員会にて詳細な検討を行いました。変更対象となった規則は以下のとおりです。

- 定款
- 代議員選出規則（選挙方法）
- 役員選出規則
- 学術集会会長選出規則

・ 選挙管理委員会規則

各規則の内容が十分に反映されていることを確認し、最終的には10月の社員総会で承認されました。今回は定款を含む規則変更という重要な取り組みであり、緊張感を伴いましたが、選挙管理委員、理事の皆様、そして当委員会メンバーの多大なご協力により、無事に完了することができました。心より感謝申し上げます。

今後も当委員会では、既存の規則の変更や新たな規則の策定に迅速かつ適切に対応し、学会運営のさらなる向上に努めてまいります。引き続きよろしくお願い申し上げます。

文責：西中 直也

リバース型人工肩関節運用委員会

担当理事 **菊川 和彦**　新委員長 **松村 昇**
前委員長 **山門 浩太郎**

RSA運用委員会では、リバース型人工肩関節全置換術適正使用基準（RSAガイドライン）適用についての相談を受け付けています。「判断に迷う場合はRSA運用委員会に相談する」と記載があるとおり、あくまでも相談であり許認可の決裁をおこなうわけではありませんが、判断に迷う症例の相談は常に受け付けています。症例の概要と質問内容をパワーポイント等のファイルにまとめて、肩学会ホームページのオフィシャルメールアドレス（office@shoulder-s.jp）にご送付ください。

ところで、前回のニュースレター発行から、ガイドラインの変更などといったRSAの使用に関連した特別なイベントは発生していないのですが、委員会の構成が変更されます。ついては、2025年1月からリバース型人工肩関節運用委員会は菊川理事（再任）と近く選任される新委員長のもと新たな委員を加えた新体制に移行します。つきましては、私は今期をもってリバース型人工肩関節運用委員会の委員（および委員長）を退任いたします。至らない点が多々ありましたこと、何卒ご容赦賜りますようお願い申し上げます。また、これまで多大なるご支援を賜り誠にありがとうございました。重ねて感謝申し上げます。

文責：山門 浩太郎

日本肩の運動機能研究会運営委員会

新担当理事 **西中 直也**　委員長 **船越 忠直**
前担当理事 **森原 徹**

日本肩の運動機能研究会（以下、研究会）は独立した団体ではなく日本肩関節学会内の一組織であり、研究会会員は日本肩関節学会会員（正会員、準会員1号、2号）で構成されています。研究会は日本肩の運動機能研究会運営委員会（以下、運営委員会）により運営され、実務は研究会世話人会が行います。運営委員会では、研究会会員が活躍、成長する場を提供すること、研究会が発展し様々な形で学術的業績を報告できる機会を提供することを目標としており、日本肩関節学会理事会、代議員会と綿密に連携し問題点を解決したいと考えております。

近年、研究会会員の活躍は目覚ましいものがあります。理学療法士の伊藤 雄先生（整形外科北新病院）は第三回(2023年度)　国際論文奨励賞を受賞されました。また、第51回日本肩関節学会の採択演題の中からベストアブストラクトとして、同じく理学療法士である星川恭賛先生（山形県立保健医療大学大学院）、幸田仁志先生（関西福祉科学大学　保健医療学部リハビリテーション学科）、甲斐 義浩先生（京都橘大学　健

康科学部）の3人の先生が選出されております。

さらに、運営委員会においても世界で活躍する研究会員を応援したいと考えております。2023年ローマで開催された第7回国際肩肘セラピスト学会（ICSET）において、ICSETの開催支援組織として国際肩肘セラピスト学会連合(ICSSSET)が設立されました。日本はICSSSETの４つの設立国として、ヨーロッパ、オーストラリア、アメリカ合衆国と共に今後のICSETを発展させていく義務があります。すでに2026年にバンクーバーで開催されるICSETに向けて、scientific committee （研究会からは代表世話人の村木孝行先生が参加）が立ち上がり、keynote lectureやsymposium 等の企画について話し合われています。より多くの会員の皆さんに研究会及びICSETで発表して頂けるように邁進して参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

このように研究会の役割が広がり、より発展させていくために世話人を増員することとしました。新たに世話人に就任されたのは、石川博明先生（東北大学病院）、内田智也先生（トヨタ記念病院）、宮本梓先生（慶友整形外科病院）の三名です。お三方には、国際学会との連携、および運営委員会との円滑なコミュニケーションを図るために大きな力を発揮していただきたいと思います。また、研究会の創成期から長きにわたり研究会を支えてくださいました立花孝先生（信原病院）が運営委員会と世話人会をご退任されました。これまでのご尽力に運営委員会、世話人会一同、深く感謝いたします。

文責：船越 忠直

用語委員会

担当理事 **田中 栄**　委員長 **佐野 博高**

用語委員会では、委員会発足時からの課題として、肩関節可動域測定法の改訂作業に取り組んでいます。2024年2月に椎体番号を用いた肩関節内旋可動域の測定法や、肩関節屈曲90度（いわゆる3rd plane）における内外旋角度の測定法を追加収載し、内転角度の表示・測定法について修正を加えた改訂案に対して、会員の先生方から広くご意見を頂きました。これらを基に改訂案のブラッシュアップ作業を行い、10月の本学会役員会において日本肩関節学会の改訂案として報告させていただきました。今後は、この改定案を日本整形外科学会や日本リハビリテーション医学会に提示し、改訂の実現に向けた働きかけを進めて行きたいと考えています。

次に、「（いわゆる）五十肩」については、2024年2月から3月にかけて役員・名誉会員を対象として行ったアンケート結果について検討を行いました。寄せられた様々なご意見を踏まえて、当委員会としては（いわゆる）五十肩」は学術用語としては不適切であるが、依然としてこの用語に対する認識は一致をみていない、という結論に至りました。そのため、現時点においては、2021年の雑誌「肩関節」に掲載された本学会学術委員会の「今後日本肩関節学会や日本肩の運動研究会での発表、雑誌肩関節への投稿論文ではISAKOSの提言に基づいた用語を使用するが、健康保険・社会保険の診断名や患者さんへの説明の際に肩関節周囲炎や五十肩を用いてもまったく問題ない。」という見解を維持すべき、と考えています。詳細については、2024年9月10日付で本学会web siteの会員ページに掲載していますので、ご参照いただければ幸いです。（https://www.j-shoulder-s.jp/playapp/info_prev/survey.html）

一方、「臼蓋」、「サイレント・マニプレーション」につきましては、文献的調査を行うとともに、会員を対象としたこれらの用語に関する意識調査を行いました。今後、アンケート結果も踏まえてこれらの学術用語としての位置づけについて検討し、本学会web site等で公開していく予定です。

会員の先生方におかれましては、引き続き当委員会の活動にご理解・ご協力くださいますようお願いいたします。

文責：佐野 博高

選挙管理委員会

委員長 田崎 篤

2024年度は、web投票の定常化に伴う選挙関連規約の変更を行い、社員総会で承認を得ました。理事選挙、代議員選挙および第54回学術集会会長選挙を行いました。
以下の通り決しました。

以下敬称略

第54回日本肩関節学会学術集会会長

学術集会会長選出規則8条

- 菊川 和彦（マツダ病院 整形外科）

理事

役員選出規則第8条　当選人決定該当者

- 今井 晋二【◎】（滋賀医科大学 整形外科教室）
- 内山 善康（東海大学医学部付属八王子病院 整形外科）
- 菊川 和彦【〇】（マツダ病院 整形外科）
- 後藤 英之（至学館大学 健康科学部 健康スポーツ学科）
- 田中 栄（東京大学 整形外科学）
- 谷口 昇（鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 整形外科学）
- 西中 直也（昭和大学大学院 保健医療学研究科）
- 三幡 輝久（大阪医科薬科大学 整形外科学教室）
- 望月 智之（東京北医療センター）
- 山門 浩太郎（福井総合病院 整形外科）

（五十音順、◎理事長　〇副理事長）

代議員

代議員選出規則第4条2推薦基準(1)-(3)該当者

- 河野 友祐（藤田医科大学病院 整形外科）
- 桐村 憲吾（十全記念病院）
- 永井 宏和（多根総合病院）
- 橋本 瑛子（千葉大学医学部付属病院 整形外科）
- 早川 敬（社会医療法人仁愛会新潟中央病院 整形外科）
- 日山 鐘浩（JAとりで総合医療センター 整形外科）
- 平川 義弘（石切生喜病院）

- 水城 安尋（佐世保共済病院 整形外科）
- 結城 一声（山形大学 整形外科学講座）
- 吉田 雅人（名古屋市立大学 運動器スポーツ先進医学講座）

（順不同）

文責：田崎 篤

50年史編纂委員会

担当理事 **菊川 和彦**　委員長 **国分 毅**

50年史編纂委員会は2021年度に設立された特別委員会で、委員を各地域より選出し以下の先生方に引き受けて頂きました。敬称略とさせていただきますが、北海道地区大泉尚美、東北地区黒川大介、関東地区西中直也、設楽仁、松村昇、関西地区佐原亘、中四国地区大前博路、九州地区菊川憲志の8名です。またアドバイザーには柴田陽三先生に就任していただきました。

第1回の委員会を2022年12月に開催して以降、発刊までに合計10回の委員会を開催して参りました。最初に、すでに発刊されている40年史との関係を決める必要がありましたが、肩学会ホームページ上での公開となるため二つのサイトを並べるのではなく、40年史を踏襲し40年史に新たな10年の歴史を加えて50年史を作成することといたしました。新たなトピックスとしては、日本肩関節学会の法人化、リバース型人工肩関節の日本への導入、日本の運動機能研究会の設立とし、それぞれ井樋栄二先生、高岸憲二先生、浜田純一郎先生と村木孝行先生にご執筆いただきました。その他、国際交流については小川清久先生、アジア肩関節学会については菅谷啓之先生に追記していただきました。ご執筆いただきました先生方に感謝いたします。また、50年史年表を第50回総会に合わせて作成もいたしました。

そして、50年史のもう一つの宿命でありました英訳版の作成ですが、経費削減もかねてすべての日本語原稿を委員で分担して英訳することといたしました。近年は翻訳サイトや翻訳アプリの充実化もあり、それらを有効活用させていただき、最終的にNative checkを受ける形式で行いましたが、優秀な委員の皆様のおかげでNative checkも1回で終了し、日本語原稿を期日までにご提出いただけたのもあり、第51回総会に合わせての発刊ができました。

50年史編纂にあたり、世界でも最古の肩学会となる日本肩関節学会の深い歴史を目の当たりにし、諸先輩方の偉大さに感銘を受けました。当委員会は2024年12月末日を持ちまして解散いたしますが、今後50年史について何かお気づきの点がございましたら学会事務局までご連絡いただけましたら幸いでございます。

文責：国分 毅

日本肩関節学会 委員会リスト （2025年1月現在）

常設委員会

雑誌「肩関節」編集委員会

担当理事　内山 善康
委員長　新井 隆三
副委員長　二村 昭元
委員　石垣 範雄、一ノ瀬 剛、糸魚川 善昭、井上 和也、大木 聡、梶田 幸宏、川崎 隆之、河野 友祐、木田 圭重、桐村 憲吾、見目 智紀、芝山 雄二、設楽 仁、杉森 一仁、田中 誠人、寺林 伸夫、徳永 琢也、永井 宏和、夏 恒治、橋本 瑛子、八田 卓久、平川 義弘、藤澤 基之、松木 圭介、間中 智哉、水城 安尋、光井 康博、美舩 泰、三好 直樹、森川 大智、山口 浩、結城 一声

国際委員会

担当理事　三幡 輝久
委員長　長谷川 彰彦
委員　糸魚川 善昭、瓜田 淳、大前 博路、高橋 憲正、二村 昭元、藤澤 基之、松木 圭介、松村 昇、森川 大智、山本 宣幸、伊崎 輝昌（現会長として）、北村 歳男（次期会長として）

高岸直人賞決定委員会

担当理事　谷口 昇
委員長　山本 宣幸
副委員長　二村 昭元
委員　新井 隆三、井上 和也、大泉 尚美、大木 聡、菊川 憲志、木田 圭重、後藤 昌史、高橋 憲正、徳永 琢也、中川 滋人、夏 恒治、廣瀬 聰明、今井 晋二（前会長として）、伊崎 輝昌（現会長として）、北村 歳男（次期会長として）
アドバイザー　高岸 憲二

社会保険等委員会

担当理事　望月 智之
委員長　長谷川 彰彦
委員　大前 博路、見目 智紀、菊川 憲志、田中 誠人、高橋 憲正、土屋 篤志、名越 充、八田 卓久、早川 敬、日山 鐘浩、廣瀬 聰明、山口 浩

教育研修委員会

担当理事　菊川 和彦
委員長　土屋 篤志
委員　落合 信靖、河野 友祐、国分 毅、酒井 忠博、佐原 亘、末永 直樹、山崎 哲也、山本 宣幸、吉田 雅人、森原 徹
アドバイザー　後藤 英之

学術委員会

担当理事　山門 浩太郎
委員長　藤井 康成

委員　石垣 範雄、落合 信靖、梶田 幸宏、木田 圭重、後藤 昌史、田崎 篤、橋本 瑛子、水野 直子、三好 直樹、松木 圭介、山本 宣幸、横矢 晋
アドバイザー　高瀬 勝己、塩崎 浩之

広報委員会

担当理事　田中 栄
委員長　夏 恒治
委員　植木 博子、栫 博則、梶山 史郎、土屋 篤志、橋本 瑛子、原田 洋平、堀籠 圭子、美舩 泰、三宅 智、村 成幸
アドバイザー　北村 歳男

財務委員会

担当理事　後藤 英之
委員長　酒井 忠博
委員　伊﨑 輝昌、石毛 徳之、国分 毅、佐原 亘、設楽 仁、永井 宏和、中川 滋人、村 成幸、結城 一声、横矢 晋
アドバイザー　岩堀 裕介
オブザーバー　今井 晋二

倫理・利益相反委員会

担当理事　望月 智之
委員長　名越 充
委員　芝山 雄二、新福 栄治、鈴木 一秀、田中 稔、水野 直子、水城 安尋、三宅 智

定款等運用委員会

担当理事　谷口 昇
委員長　糸魚川 善昭
委員　瓜田 淳、梶山 史郎、田崎 篤、光井 康博、門間 太輔、伊崎 輝昌

リバース型人工肩関節運用委員会

担当理事　菊川 和彦
委員長　松村 昇
委員　落合 信靖、栫 博則、木村 明彦、桐村 憲吾、小林 尚史、笹沼 秀幸、寺林 伸夫、間中 智哉
アドバイザー　菅谷 啓之、池上 博泰、山門 浩太郎

日本肩の運動機能運営委員会

担当理事　西中 直也
委員長　船越 忠直
委員　甲斐 義浩、黒川 大介、見目 智紀、小林 尚史、酒井 忠博、佐原 亘、髙村 隆、田中 誠人、藤井 康成、村木 孝行、吉田 雅人、森原 徹、山口 光國、山崎 哲也
アドバイザー　岩堀 裕介、浜田 純一郎
オブザーバー　三宅 智（第22回研究会会長として）

日本肩の運動機能研究会世話人会

代表世話人　村木 孝行
副代表世話人　甲斐 義浩、高村 隆
世話人　河上 淳一、千葉 慎一、三浦 雄一郎、宮下 浩二、山崎 肇、遊佐 隆
新世話人　石川 博明、内田 智也、宮本 梓

用語委員会

担当理事　田中 栄
委員長　佐野 博高
委員　笹沼 秀幸、鈴木 一秀、田中 稔、永井 宏和、三宅 智、門間 太輔、結城 一声、吉田 雅人

特別委員会

選挙管理委員会

委員長　田崎 篤
委員　井上 和也、大泉 尚美、新福 栄治、徳永 琢也

ワーキンググループ

地方格差検討WG

担当理事　谷口 昇
委員長　大前 博路
委員　杉森 一仁、八田 卓久、三好 直樹、山口 浩、梶山 史郎

前事務局からのお知らせ

会員の皆様へ

2015年2月から10年間、日本肩関節学会の事務局を担当させていただきましたアイ・エス・エスの川村典子と申します。このニュースレターが発刊される頃には周知されていることと存じますが、2025年2月より事務局が毎日学術フォーラムさんに移管となり、弊社の事務局業務撤退という事業計画のもと業務契約が終了する2025年1月31日をもって担当を辞することになりました。

15年以上、医学系を含めたいくつかの事務局業務や国内外の会議運営に携わっており、その経験から2014年9月に弊社に中途入社、学会事務局や会議運営の担当となり、入社した次の日に前事務局であった群馬大学整形外科医局の先生方や秘書さんを訪問し、数度引継を受け、2015年2月から正式に担当をさせていただきました。

まったくの未経験の領域での事務局業務、先生方との接し方もわからず、2年位は悩んだ時期もありました。凍結肩、腱板断裂、鏡視下、拘縮、RSA、上腕骨近位端骨折などなど…初めて聞く用語で読み方すらわからない…なんていう日々でした。

メールや電話でのやり取りでたくさんの先生方とお話させていただき、学術集会での受付などで実際にお会いできた時は、一人でにんまりとしていました。本当にたくさんの先生方との出会いがありました。

仕事がうまく立ち行かず、ご迷惑をおかけしたことも多々あります。「多々」ではなく、「たくさん」ですね…

10年間、本当に長い間お世話になりました！！！

「お世話になりました」という一言では伝えきれず、アイ・エス・エスの川村ではなく、肩学会事務局の川村じゃかったの？と言われるほどとても「濃い」、肩学会に「恋」をした10年間でした。

日本肩関節学会の益々のご発展を心よりお祈りしております。

新事務局からのお知らせ

2025年2月より日本肩関節学会の学会事務局を株式会社毎日学術フォーラムにて担当させていただくことになりました。大変大きな役割の貴学会の事務局としてお役に立てるよう、誠心誠意努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2025年2月1日以降の新しい学会事務局の連絡先は以下の通りです。

《一般社団法人 日本肩関節学会事務局》
〒100-0003
東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル
株式会社毎日学術フォーラム内
TEL：03-6267-4550
FAX：03-6267-4555
E-MAIL：office@shoulder-s.jp
※平日9時半～17時半（土日祝日休み）

どうぞよろしくお願い申し上げます。

編集後記

広報委員会 **梶山 史郎**

2025年になってまだ2か月ほどではありますが、大学入学共通テスト、トランプ大統領の就任、最長寒波による大雪など、目まぐるしい日々が続いております。一方、日本肩関節学会においては、2025年2月に事務局の移転が行われました。事務局移転とニュースレター23号の編集、発行時期が重なったため、23号の発行日程がずれ込んでしまいました。お忙しい中、原稿をご執筆いただいた先生方には本当に申し訳ありませんでした。今後は新しい事務局の方々とともに、より良いニュースレターを発行できる様、頑張りたいと思います。また、この場を借りまして、旧事務局の川村さんのこれまでのご尽力に深謝いたします。長い間、本当にありがとうございました。

一般社団法人
日本肩関節学会
Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人日本肩関節学会　広報委員会
田中栄（担当理事）、夏恒治（委員長）、植木博子、栫博則、梶山史郎、土屋篤志、橋本瑛子、原田洋平、堀籠圭子、美舩泰、三宅智、村成幸、北村歳男（アドバイザー）

発行：一般社団法人日本肩関節学会
〒100-0003　東京都千代田区一ツ橋1-1-1　株式会社毎日学術フォーラム内
TEL：03-6267-4550 / FAX：03-6267-4555
E-mail：office@shoulder-s.jp / URL：https://www.j-shoulder-s.jp/